

平成21年度 第15回豊田市矢作川研究所シンポジウム記録 「流域でまもる生命（いのち）の豊かさ」

豊田市矢作川研究所の第15回シンポジウムが、下記により開催された。これはその記録である。なお、紙面の都合により基調講演とディスカッションの発言は、本誌編集委員会の責任においてその主旨を損なわない範囲で簡略した。また、会場で用いたスライドは割愛した。

平成21年度 第15回豊田市矢作川研究所シンポジウム
「流域でまもる生命（いのち）の豊かさ」

◆日時 平成22年1月23日（土） 13：30～16：30

◆場所 電気文化会館5F イベントホール

◆講演 「流域で考える生物多様性」 涌井史郎（中部大学）

◆対談 「川に遊び、川の生き物に学ぼう」 中本 賢（俳優）・阿部夏丸（作家）

◆パネルディスカッション

パネラー

丹羽健司（伊勢・三河湾流域ネットワーク）

大沼淳一（ため池の自然研究会・NPO法人

「みたけ・500万人の木曽川水トラスト」）

浅香智也（三河淡水生物ネットワーク）

新見幾男（矢作川漁業協同組合長・豊田市矢作川研究所運営協議会副会長）

コーディネーター

涌井史郎（中部大学）

コメンテーター

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

◇主催 豊田市

◇後援 国土交通省中部地方整備局／愛知県

○司会（達） これより、平成21年度第15回豊田市矢作川研究所シンポジウムを始めたいと思います。本日司会を仰せつかりました矢作川研究所の達と申します。どうぞよろしくお願ひします。それでは最初に、豊田市矢作川研究所所長 柴田一美より開会のご挨拶を申し上げます。

○柴田 皆さんこんにちは、矢作川研究所の柴田です。主催者を代表しまして、ひと言ご挨拶をさせていただきます。本日は大変寒い中、またお忙しい中多数の方にお集まり頂きまして、本当にありがとうございます。また、シンポジウム開催にあたりまして、国土交通省中部地方整備局と愛知県にご後援を頂きました。ありがとうございます。

さて豊田市は平成17年4月の合併により、市の面積が918 km² と愛知県全体の面積の約2割を占めるようになりました。日本有数のモノづくりを中心とする産業都市でございます。しかしながら、市の約7割を占める森林、そして矢作川、のどかな田園地帯など、豊かな自然がございます。豊田市は環境モデル都市として、人と環境と技術が融合する「ハイブリッドシティとよた」をコンセプトに、産業都市としての特性と市民力を活かした、活力ある低炭素社会づくりに取り組んでいます。中心市街地を流れる一級河川「矢作川」においては、流域面積が1,830 km²のうちほぼ5割が豊田市でございます。きれいな川の指標となるアユをはじめ、魚類や昆虫類

など多くの生物が生息しております。

矢作川研究所は平成6年、矢作川流域の自然環境の保全・創出を目的に、「一河川に一つの研究施設を」ということで設立されました。当研究所は豊かできれいな水の回復と、人々の生活にゆとりと潤いを与える矢作川をめざし、流域の生態系の研究を進めております。そうした研究活動によって科学的に問題を明らかにし、研究成果を住民に報告し、矢作川の自然について一緒に考え理解を深めていくことが生物多様性の保全や美しい川を取り戻すことに繋がってまいりました。確信しております。

矢作川研究所のシンポジウムは、毎年豊田市で開催されてきました。今回は15回目の節目を迎え、COP10パートナーシップ事業として位置付け、主に県内の自然環境保全に関わる多くの団体および研究者との交流を図り、多くの人々に我々の活動を知って頂くため、初めて名古屋で開催しました。今回は「流域でまもる生命（いのち）の豊かさ」がテーマです。様々な状況変化から自然が危機に瀕しており、山、里、川、海と全体で取り組む必要性があります。地域の事情や自然特性が異なる中で行われている。流域を視野に入れた自然保全活動を紹介して頂き、これから流域住民の手でのちの豊かさや日々の暮らしを守る持続可能な活動を行っていきかけづくりの一つになればと思っています。今日の講演は中部大学の涌井様、俳優の中本様、作家の阿部様にお願

いています。またパネルディスカッションはお手元の資料にありますように、パネラーを丹羽様、大沼様、浅香様、そして新見様に、コメンテーターを涌井様をお願いしています。コーディネーターは当研究所の洲崎です。

今年10月に名古屋でCOP10が開催されます。当研究所の取組や成果、矢作川流域の諸団体の活動等について、COP10関連行事におけるブース出展と開催期間中に実施されるエキスカッションでの紹介を予定しておりますので、今日この会場にお集まりの方、県民の方々、行政・自然環境保全に関わる多くの研究者ならびに各種団体の方に、ぜひ参加をお願いしたいと思っております。

最後になりましたが、このあと様々な内容でプログラムが展開されていきますので、会場の皆様には最後までご参加を頂き、一緒になって考え、ご意見を頂ければ幸いです。矢作川研究所はまだまだ発展途上でございます。大人になりきっていませんが、今後も河川および流域の自然環境の保全に向けて研究活動を続けてまいります。一層の皆様方のご協力ご支援をお願い致しまして挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

○司会 続きまして、ご来賓の方からお言葉を賜りたいと存じます。ご来賓を代表して、国土交通省中部地方整備局より豊橋河川事務所所長の畠山慎一様、お願い致します。

○畠山 皆さん、こんにちは。ただいま紹介を頂きました国土交通省中部地方整備局で矢作川を管理する仕事をさせて頂いております豊橋河川事務所所長の畠山です。本日は、21年度の矢作川研究所シンポジウムがCOP10のパートナーシップ事業ということで、初めてこの名古屋市で開催されるということで、このように多くの皆様方をお迎えしまして盛大に開催されることを、まずはお慶び申し上げます。また、それと共に開催に対してご尽力されました豊田市矢作川研究所のスタッフの皆様方をはじめとしまして、関係者の皆様方のご尽力にも感謝を申し上げたいと思います。

さて、矢作川の中下流部を管理しております河川管理者の立場から、若干ご挨拶というかご紹介をさせていただきます。私どもが管理しております矢作川というのは、古来は美しい川と書きまして「美川」というふうと呼ばれていたそうでございます。この名前が発祥になりまして、いわゆる愛知県の東部三河地方、この呼称の由来にもなった、手前味噌になりますけれども由緒正しい川でございます。

川の特徴としましては、白い河原ということに象徴されますような砂洲が特徴でございます。そして、全国的にも比較的豊かな生態系を持っている川ではないかと考えておりますが、近年様々な生態系に関する課題も出てきております。例えば先ほどの砂洲の話で申しますと、下流部が樹林化していることによって、砂洲やヨシ原がなかなか昔のように保持できなくなり、消失、消滅してきているという傾向があります。

あるいは、ダムや堰などの川を遮るような人工的な工作物や、今はもうやっておりませんが砂利採取によりまして、河川の流れ方向の連続性が昔のように確保できにくくなっています。また外来種も見つかっており、矢作川の生態系に影響を与えているのではないかと、という懸念もされてきています。

こういった課題を解決していくために、我々行政としましては、矢作川研究所をはじめとした研究者の方々のお力も借りながら、整備だとか改良、改善に取り組んでいる訳ですけれども、何しろ心強いのは、先ほど柴田所長がおっしゃられたように、矢作川研究所が一つの矢作川という河川に特化しまして、科学的な知見を蓄積しているという研究機関であると同時に、一つの自治体が継続してこれを運営していくという全国でも例を見ないような研究機関であることです。こういった機関と連携させて頂いて、矢作川をより良い川にしていきたいということで取り組んでいるということでございます。

今年はCOP10が10月に開催される年ですけれども、同時に東海豪雨から10年の節目の年でもす。矢作川におきましても、10年前には豊田市内を中心に、大変大きい洪水の被害が出た、あるいは河床が攪乱されたり土砂が大量に出てきたことで、生態系にもダメージを与えたというようなことも新聞で報道されました。昨年7月には矢作川の整備計画、20、30年後のあるべき姿をめざしまして、計画を作らせて頂きました。こういった計画を着実に進めるために私どもも、今日のテーマでございますように、流域各所で生物を守る、あるいは矢作川を良くするという活動を行なっている方々ともより連携を強化にして、新しい仕組みも色々考えていきたいと考えている年でございます。そういう意味で今日のシンポジウムは、私ども河川管理者にとっても今後の河川行政の展開を考える上で非常にヒントになる、あるいは貴重な知見を得られる機会だと考えてございます。活発なご議論をよろしくお願いしたいと思います。

最後に、今日のシンポジウムのご盛會を祈念申し上げます。簡単ではございますけれども、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。次に、ご来賓としてお見えの方をご紹介致します。愛知県建設部河川課長伊藤和久様、本日はありがとうございます。

それでは、本日のプログラムに沿いまして、講演に入りたいと思います。本日は「流域で考える生物多様性」と題しまして、中部大学教授 涌井史郎様にお越し頂きました。涌井様、お願い致します。涌井様は、TBS「サンデーモーニング」でお馴染みと思いますが、ハウステンボス等の代表作品からもわかるように「人と自然の空間的共存を図る造園技術」をベースに数多くの作品や計画に携わっておられます。それでは涌井様、お願い致します。

○涌井 たいまご紹介頂きました涌井でございます。まず私は、市が一つの河川についてこれだけの研究所を持っていることについて敬意を表したいと思ひますし、それから併せてCOP10の広報・参画推進委員会の座長として、こうしたCOP10に絡んだ催しを開いて頂きましたことを心から感謝申し上げたいと思ひます。今年をご存知のとおりCOP10が開催されますけれども、実はそれ以前にもう一つ皆様方にご記憶頂きたいのは、「国連生物多様性年」でもあるということです。1月1日にベルリンでオープンして9月の国連総会で各国代表がメッセージを提供し、12月31日にクロージングイベントが日本の金沢で行われます。国連で初めてこうした年を設けたわけですが、このことについてもぜひ記憶に留めて頂ければと思ひます。

さてこれから30分間、お二方の対談とパネルディスカッションの前座のようなことで少しお話をしていきたいと思ひます。私がお話をしたいのは、実は環境というのはすべてが連関をしている、ここにもございますように「山は海の恋人、川はその仲人」という状況であることをもう一回再認識する必要がありますと思ひます。私は今、世界は産業革命300年以來の産業革命のくびきを脱して、環境革命の時代に突入していると思ひます。それはなぜかといひますと、実は今までの産業革命の時代には、自然はあくまでも工業資源であつて、しかもその存在は無限であるということ为前提にして文明を発達させてきた。しかしここへきて地球環境、とりわけ自然のそれぞれの要因がリミッタブルであるということが非常にはっきりしてきた。例えばエコロジカル・フット・プリントという考え方があります。エコロジカル・フット・プリントは単位面積当たりの生物生産量とそこに活動する人間の活動量というものを引き比べるものだと考えて頂ければ分かりやすいと思ひます。もし仮に地球人口が日本人並みの生活をしたとすれば、地球は2.4個必要である。アメリカ人並みの生活をすれば、地球は5.3個必要である。さらに言えば、現在の人口と活動量だけでもすでにもう地球は一つの地球で収まりきれないと、こういう現実をやはり我々は突きつけられていると思ひます。そしてそれは皆様ご存知のとおり、温暖化、その他、様々な形で我々の日常生活にも実感、体感できるという様子につながってきているわけです。

なぜこんなことが起きたのか。それはこのスライドにございますように、皆様から見て左側の46億年の地球の歴史を1年の暦に縮めたものをご覧頂くと分かると思ひます。地球が38億年前にいのちの星になって以來、地球のシステムというものは生物が織りなしてきた。我々がここで酸素を吸うのもそうですし、38億年かけて生物が作り出したシステムの上に人類が500万年前に登場したわけです。1年の暦で言えば12月27日あたりに人類が登場したのですが、我々が文明と言っておりますものは、12月31日の午後11時59分に生まれました。しかも産業革命、近代科学が誕生した300年前というのはたった2秒前の話です。この2秒間で、地球環境というもの

がめちやくちゃになってしまう。歴史的な自然観では自然は元々神様であつたが、経済的にだけ考えるようになってしまった。その結果「自然は消費するものである」という考え方に結びついて、我々は未来の子ども達に本当に今と同じような条件を残せるのかということが問いかけてられている時代になっています。

ところで若干誤解されていることがあります。1992年にリオ・デ・ジャネイロ・サミットで、2つの兄弟の条約が発議されました。それはご承知のとおり、気候変動と生物多様性条約です。しかし、この年次の順序というものを少し見て頂きたいのですが、地球環境サミットの翌年に世界で締約されたのが生物多様性条約で、その翌年に気候変動枠組条約が締結されたということです。この文脈は何を意味しているのかといひますと、地球上の生命が織りなしたシステムが歪み始めた、その要因が気候変動である、そういう順序立てなのです。従つて昨年12月にCOP15というものがコペンハーゲンで開催され、結果としては失敗したわけですが、今年のCOP10、生物多様性条約締約国会議というのは、極めて大きな意味を持っているということにぜひご理解を頂きたいと思ひます。

通常、生物というのは入り口は利己ですが、出口は利他である、これをよく皆さん方と共に考えていきたいと思ひます。実はネズミがネズミを生み、そのネズミがネズミを生む、そういうことになりますと、理論的にはこういう数字になります。しかし現実にそんなにネズミはいるでしょうか。もしそうであるとするなら、この会場にも1、2匹のネズミがいなくてはならない。しかし生物というのは、自分が生き残っていくためには他と共存しなければならないという働きがあります。個体群の規模というものは、ある一定のところで収まっていくという特色を持っています。これがこの地球環境に、生物多様性をもたらす一番大きな理由です。すなわち、最初は「俺が、俺が」ですが、最終的には共存をするという選択をする。しかしこのカーブのように増加し続けているのが人類です。これは何を意味するのか。生物多様性や生物の絶滅ということが盛んに言われていますが、一番先に絶滅するのは、我々人間である可能性ははるかに高い。その傍らで何が起きているのか。実は1万年前には100年にたった1種の生物しか絶滅していなかったのが、現在では1日に100種の生物が絶滅する。これは65億人の人間を乗せた地球号という飛行機が40万点の部品でできているとするならば、1日に100ずつ、あるいは5年後には、300ずつの部品を下に落として飛んでいるということですから、私が今申し上げるような懸念がお分かり頂けると思ひます。

さて、生物多様性は何も生物種の問題だけではせん。生物と人間の関係、文化、そうしたものが複雑に絡んだものです。我々人間は、どこにいるかといひますと、頂点に達しています。多様な生物が、ちょうどランプのカードのようにピラミッドを作っておりまして、その危ういピラミッドの上

に、我々人間というものが存在している。多様性が失われるということは、我々の生存の基盤が失われるということとイコールです。そして我々は常に生態系サービスというものに支えられているという現実があります。例えば酸素や木材、食料といった供給サービス、洪水調整であるとか、気候調整といった調整サービス、さらに心を涵養してくれる文化的なサービス、こうしたサービスは全て生物がもたらしてくれる結果であります。例えばこれは八角で、ご承知のとおり、今の豚インフルエンザの特効薬とされているタミフルの原料です。あるいは最近、ミツバチがいなくなりました。もう人間とつきあうのは嫌だとミツバチがいなくなると、皆が大慌て、大騒ぎをしている。すべて我々の営みというのは、実は生態系サービスという生物多様性がもたらす上に存在をしている。これが国連生物多様性年である今年、COP10が愛知・名古屋で開催されるということにつながるということです。

さて我が日本は大変厳しく、そして片方では豊かな個性のある国土でした。その国土をどうやって開発していくのか、確かに自然を飼いならすということが、日本が人口を増やしていく大きな一つの課題でした。しかし、そこで身に付けました作法というものは何かといいますと、実は水とのつきあい、自然とのつきあいといったものでした。例えば地図上ではこのように見えても、我が日本の国土はまるで毛細血管のような水網によって支えられています。そしてその中でも陸域と水域の間に形成されるエコトーン、移行帯が、我々に実に多くの生態系サービスをもたらしてくれます。そして我々日本人は、そうした国土と戦っていくために「いなし」という技術を身に付けてまいりました。それは何かといいますと、自然と正対していくよりは、自然の応力を最小化して、なおかつそこで恒常的に生態系サービスを得るといふ知恵を作ったのです。それが農地に典型的に現れていると言っても言い過ぎではありません。日本の美的な自然景観というのは、火と水と風によって生まれたと言っても過言ではありません。先ほど申し上げたように自然を読み取る力を付けて、その自然の力を「いなす」という技術を付けていったのです。

さらに言えば、生態系サービスの恒常的確保というものを考えていった。例えば河川の治水で言えば、武田信玄の「雁堤防」や「信玄堤」です。洪水の溢れる水は受け入れても水の力は抑えるというような一つの日本独特の治水工法に結びついてまいりました。そしてさらに言えば、この世界の陸地面積の0.3%しかない日本でマグニチュード6以上の地震の2割を引き受けているという現実の中で、昔の人達がどうしていったのかといいますと、これは神戸の阪神・淡路大震災ですが、公園の樹木が焼け止まりをするといった形で植物を応用するなどの方法を探ってまいりました。またご承知のとおり、河川においては治水工法という方法を採用して、自然物を河川の中に投入して、生物多様性を保全すると同時に、先ほど申し上げた「いなし」の治水というものを心がけていっ

たわけです。その結果、「山は海の恋人、川は仲人」といった精神を我々は身に付けてまいりましたし、里山のみならず、里川、里海というものすら作り上げていった歴史があります。対してヨーロッパはどうでしょう。ヨーロッパの都市は自然と隔絶されており、城壁によって囲まれた中にはほとんど自然が無く、外側に自然を置くという関係でした。文明というものは自然と対峙される存在だという考え方が、1000年間でヨーロッパの緑をこれほどまでに失わせしめていったわけです。その中に産業革命が起きる。その結果、自然資源を敵に回すという方向になって、この産業革命の時代を過ごしてきたわけです。

日本では、江戸のような当時世界一の規模と言われている都市ですら、自然と入れ子の構図を作ってきたのです。常に生態系サービスと呼吸し合うという関係を作りました。しかし戦後、そこにヘンリー・フォードの思想、すなわち自動車、道路、郊外、開発といったモデルが持ち込まれることによって日本の都市は巨大化し、モンスターの様になりました。その結果、自然資源はどんどん蚕食されていき、川の上に蓋をして高速道路を作り、山は荒れ放題といった状況にまで追い込まれていった。経済発展、経済開発が優先するというような状況でした。さて、先ほど申し上げたように、元々の江戸に豊かな緑があったのに、現在はこれほどまでに少なくなりました。自然と呼吸し、自然をいなし、自然の生態系サービスを向上的に確保するという我が日本の自然との思想は見事にその姿を消してしまった、と言っても言い過ぎではありません。

現在我々はジレンマではなくて、三つの要素の矛盾であるトレリンマに悩んでいます。エネルギー、エコノミー、エコロジー、この3つのEのトレリンマです。これをどうやって解決していくのか、その解決策については「トリプル・ボトムライン」しかないというのが定説です。トリプル・ボトムラインとは一体何かといいますと、コミュニティーの力と経済の力と環境の力、これが等分に働くような地域社会を作らねば、持続可能な未来というものは勝ち取れないという考え方です。そしてそれが交通手段の中でも、モーダルシフトというような考え方に現れて、自動車よりも船、船よりも鉄道、あるいは都市は巨大に広がっていくのではなくて、コンパクトシティーをめざすべきだというような議論が出てきました。これを現実に体现した一つの類例が韓国です。日本をモデルにして河川を埋め立てて、そこに高速道路を作った。しかしそれが韓国のソウルという都市を非常に味気の無いものにし、さらに世界的な環境評価というものが非常に低くなった。そこに着目しまして、現在の李明博（イ・ミョンバク）大統領がソウル市長時代に、清溪川（チョン・ゲチョン）という李王朝時代の風水に非常に重要な役割を果たしたと言われていた川を再復元しました。高速道路を壊し、こうした河川を作り、そしてこの下に高速道路を入れるという大規模な試みをしました。すなわち、今後都市ですら環境というものを前提

にして語らねば、もう世界的な経済の中でも立ち行かないという状況になりました。

これからは自然資本の時代と言われています。先ほど来、私が申し上げたように、今や森、川、海の繋がりというのは、危機に瀕していると言っても言い過ぎではありません。例えばこの矢作川でも、様々な形で流域の方々は戦ってまいりました。戦っていくがゆえに相手を知らうということで、川を学び、川と共に暮らしていく知恵を模索してきた。それが流域の歴史だったわけです。そこに気候変動のリスクが、河川に大きな形で集約されてきました。河川に対する洪水と渇水のリスクは、極めて大きなものになるだろうということが予想されています。そう致しますと、河川を洪水などから守るために一体どうするんだということがテーマになるわけですが、必ずしもダムや堤防が解決策ではないということを、これからよく考えていかなければならない状況であろうかと思えます。例えば上流部の森林、現在では林木の1m²あたりの単価といった経済指標だけで上流の森林域を評価していますが、実は森林が持つ多目的・公益的な機能には大変なものがあります。ところがそうした森林が持っている多目的・公益的な機能というものは、1本1本の木材価格には投影されていません。だから山が荒れていくわけです。しかし果たしてそれでいいのでしょうか。決してそんなことはないと思えます。

今我々が学ばなければならないことは、かつての我々の祖先の知恵です。我々の祖先は、里山というものを西洋の都市の城壁のように作りました。そしてその里山の内側に野辺という、今でいうコモンズ、入会地を作って、そこで茅場と採草放牧地を作り、その内側に野良、そして里がある構造を作りました。すなわち里山から内側では人間が自然に手を入れることによって、最大限生態系サービスを楽しむという空間を作ったのです。最近のおじいさんはゴルフ場に芝刈りにまいりますが、この当時のおじいさんは山に柴刈りに行った。そして、まさに山の神が支配をして、山の神のお許しを得なければ絶対に手を入れてはならないというのが奥山であり、ご神体そのものでした。このように極めて自然をたくみに切り分けて、生態系サービスと災害等の自然の応力を小さくしてきた。里山一つあれば、実は集落の日常のエネルギーや産物というものはほとんど賄える、こうした独特の文化をこしらえていったのです。それでもその容量を超えればバランスが崩れます。この周伊勢湾貧栄養植生の地域に特徴的な現象ですが、江戸の末期から明治の初めにかけて、瀬戸物を焼くために里山が禿山にどんどん変わっていきました。しかし、我が日本はありがたいことに、人が積極的に手を入れることによって、100年経てば自然がある程度のところまで戻ってくるという、ありがたい特質を持っているのです。

そうした自然を「いなす」という知恵はどこから来たのか。西洋で自然科学が発達する以前、なんと享保、徳川吉宗の時代に「全国生態系調査」というものを行っております。これは享保の「元文諸国産物帳」で、植物から動物、昆虫に至る

まで徹底的に調査を命じております。さらに我々日本人は世界では唯一虫を楽しむ、虫を愛するという文化を持っております。つい大正くらいまで、この市松模様の屋台があれば、虫屋さんでした。虫を売って商売にできる国というのは日本以外、他にはございません。しかも夏になればホタル狩り、秋になれば虫の音を聞くといった風雅な趣味があり、生物と我々の繋がりを非常に深くしてきました。その基盤が、実は農的な生活です。私はあえて農業とは言っていません。農業というのは生産物や収穫量、エネルギー投入量という数値に関わる話です。私は農業の議論よりも、農的生活の議論を優先すべきだとかねてから主張しています。先祖伝来の土地を愛するライフスタイル、これが今危機に瀕している。食料も木材も外国に頼らざるを得ないという状況にあって、食料自給率も低い中で、土地と対話をしながら見事な国土管理を施してきた。地すべり地帯には等高線のように水田を積み上げるといった見事な知恵を働かせてきた。

しかし、耕地整理などによって過去から現在に至るまで、農地の生態系がどんどん変化してきた。地球4周分といわれている自然河川の衰亡に加えて、人工の農業用水路がどんどん埋め立てられていく。そしてさらに言えば、農的生活が経済指標だけで議論されるものですから、農家の人口がどんどん減っていく。そして今や埼玉県に匹敵するほどの耕作放棄地が生まれている。さらには一番重要な、国土の隅々にいたるまで人が住んでくれるという状況に対し、どんどん集落が消滅をしていっているわけです。この島国の日本は生態的には閉鎖系です。ゆえに生態系サービスの最大効を図らなければならなかったことが見事に景観に投影されてきたわけですが、そうしたものを非常に無視する形になってきている。ここへきてようやく人の生活を生態系サービスや自然との関わりにおいて景観化しようという景観法ができ上がり、環境と景観と風景と風土が循環できる方向を築く状況になってまいりました。

未来はエコロジーとエコノミーの融合の技術開発に託されるといっても言い過ぎではありません。もともと「エコ」という言葉はギリシャ語の"oikosu"です。「共同体」とか「家」という意味です。これに「ロゴス(logos) = 真理」を足すと"oikosu logos"エコロジーですし、「ノモス(Nomos) = 秩序」を足すと"oikosu nomos"エコノミーです。つまりエコノミーとエコロジーは対決するものではなくて、同じ土俵にあった、両面的なものということを考えねばなりません。そうした意味で我々がどのようにこれから環境の影響を緩和するのか、あるいは環境条件に適応していくのが知恵として大変問われるところですが、今そうした中で、全国エコロジカルネットワークというものが構想されつつあります。これは図らずも私が委員長をしております。これは地区から都市、あるいは広域に至るまでどんどん連結されて繋がり合う国土をどうやって取り戻すのかと、こういう方向で進めています。それが国土形成計画法の改正に繋がり、エコロジカルネットワー

クということを考えていこうという動きになっています。これは関東のエコロジカルネットワークですが、こうした中に具体的に思想から手法への転換が図られようとしています。

首都圏における都市環境インフラのランドデザインというものがあります。その中で、この多摩三浦丘陵に非常に貴重な緑が残っています。この緑を市民の力でもう一回再構成しようということで、13の自治体が広域自治体連携をしています。それを見ておりましたこちら側の利根川流域が、トキ、コウノトリを指標とした南関東エコロジカルネットワーク構想というものを作りました。国土交通省関東地方整備局、農水省関東農政局が手を組みました。群馬県、栃木県、埼玉県、千葉県、千葉県の6つの拠点都市が連携をしてトキとコウノトリを呼び戻せるような地域を作っていく。実はこの反対側には何がありますかといいますが、八ツ場ダム構想が無くなった後の総合治水対策を農政と手を組みながら、なおかつ生物多様性の指標であるコウノトリとトキを取り戻していく形で、市民と共に地域を形成しようということが動き始めています。これもたまたま私が委員長をしております。元々関東の絵図を見ますと、どこにもトキとコウノトリがいたということがはっきりしています。そこで今申し上げているこの6つの拠点で、生態系ピラミッドの上位に位置し、水辺を主要な生息環境とする中・大型水鳥類を取り戻すことによって、地域を取り戻していこうというわけです。これからは正に多様な空間で多様性を活かした取り組みを行うことが非常に重要です。生物多様性も重要ですが、それ以上に我々の取り組みの多様性というものも非常に重要なのです。多様な主体が多様な空間で多様な機能を発揮するということです。

従来の公権力が強い時代には、「私」を守るために「共」というものを作ってきました。それはそれで結構だったわけですが、民主化によって、公が共を取り込んで「公共」というものになりました。その結果、我々自身、住民同士が繋がり合うという肝心の「共」の本質というものが極めて小さく萎縮してしまったのです。今後の世界というのは、そういう意味で元々我々の間にあった「共」というものをどのように取り戻すのか、そしてその「共」の中で生き物というものが、単に人間と生き物という関係ではなくて、人間が生き物そのものであるという視点からどのように考えていくのか、それが非常に重要であろうと思います。それは「一隅を照らす」という伝教大師の言葉にもありますように、一人一人が重要な視点を持って、この地域を支えあって、我々の世代が未来から収奪するという現状を反省し、子どもや孫に、あるいはまだ見ぬ我々の子孫の時代に、我々と同じ条件をきちっと残せるかどうか、こういったところにどういう責任感を果たしていくのかということが問われていると思います。

ノーマン・マイヤーズが「地球と世界を救済する機会に恵まれた時代に生きているなんて、なんと幸せなんだ。これは特権だ。もしここで正しい答えを出すならば、何世代にも渡って亘って間違いなく感謝される」と言っています。そう

した意味でもう一度全てが繋がりが合う、これが我々のキャンペーンです。今「地球のいのち、つないでいこう」というバッジを着けておりますが、まさに森か海、これを人と共にどのように繋げ合っていくのか、これが問われる時代になったということをお願いして、私の前座のお話を閉じさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○司会 どうもありがとうございました。短い時間でしたが、たくさんの入り口を頂いたような気がします。

次に、俳優中本賢様、作家阿部夏丸様による対談「川に遊び、川の生き物に学ぼう！」を、お楽しみ頂きたいと思えます。中本様は、ご紹介するまでもなく「釣りバカ日誌」の船頭さん、それから私たちのこの地方では「Let's ドンキホーテ」でお馴染みと言った方がいいかもしれない、皆さんよくご存知の俳優さんです。御著書「ガサガサ探検隊」の名のとおり、今日は多摩川のガサガサ隊長として語って頂きたいと考えております。また、阿部様は数々の児童文学大賞を受賞なさっていますが、今日は、矢作川の川ガキが育てて川オヤジとなった方、矢作川水族館館長としてお越しになりましたと紹介させて頂きたいと思えます。それでは、どうぞよろしくお願い致します。

中本：皆様こんにちは。中本賢です。

阿部：こんにちは。阿部夏丸です。

中本：涌井先生の話、思い切り真剣に聞いていたら、立てなくなりました。お尻がしびれちゃって、今半分、神経全然感じないんですけど。いい話だったね。何が一番印象残りました？

阿部：うーんとね。

中本：おじいさんは、ゴルフ場に芝刈りにという話が最高でしたね。それからやっぱり「いなす」、「いかす」じゃなくて「いなす」。僕、武道やってたんですけど、西洋のスポーツで「いなす」というのは、あまり言われないうんですけど、柔道とか剣道やると「いなす」「いなす」って、よく先輩に言われるんですよ。押されたらその押した力で相手を倒す。ああなるほど、そうか、日本の自然というのは、強大な力があって、それを対抗するんじゃないって、いなして倒すということなんだな、と腑に落ちました。

阿部：僕もね、一番印象に残ったのは、やっぱり都市と森を離すという西洋の自然との関わり方。日本は全部取り込んでますよね。川端（かばた）なんかでもそうですし、家の中にまで川の水を取り込むなんていうのは、

中本：涌井先生の話じゃないですけど、西洋の庭は左右対称だっというのね。日本の庭園というのは、自然がそこに必ず入っているという。なんか、制覇するのと受け入れるという感覚の違いという話をよく聞いたことがありますけど、もやもやしていたものがスコーンと入りました。

涌井先生の大きい枠組みの話、前座だなんて言われたものだから、出にくくてしょうがない。

阿部：困っちゃいますよね。

中本：小さい話、いきましょう。

今回のテーマは「流域で守る生命(いのち)の豊かさ」ですね。涌井先生の「いなす」っていう話を聞いててすごく思ったんですけど、いなすためには相手を知らないとだめですよ。

阿部：そうですね、関わること。

中本：やっぱり相手を知らないと、なかなかいなすというわけにもいかない。昔は自然体験として、子どもは家事の手伝いや兄弟の面倒を見ながら、たくさん自然の中で遊んでいましたけど、最近の子は、特に地方の子がひどいんですけど、自然の中に出て行かないですね。先日、すごく面白い景色を見てしまったんですけど、僕は東京の多摩川流域の小学校で総合学習の時間に、子どもらを川に連れて行っていろいろ遊ばせているんですね。前はみんな何でも源流に行きたがって、川の始まりはどこだという話題ばかりだったんですけど、最近はやっぱり都市の川の面白さは河口にあるというふうに気付き始めまして、京浜工業地帯の真ん中のちっちゃな干潟に、みんなで行くようになってきたんですね。

阿部：山の森の中のきれいな水のところって確かに水がきれいなんですけど、生き物がいないですよ。

中本：生き物がいない。しかも、山に行くと「触るな。入るな。いじるな」。保護がメインですからね。特に多摩川は東京都の自前の水源ですから、非常に保護されています。

阿部：ああ、そうなんですか。

中本：ところが河口に行くともちゃくちゃです。全部、工場地帯。左、羽田空港。こっち、工場地帯っていうところで、ところが小さな干潟にヘドロがなくなって、砂が見えてきたら、生き物がいっぱい出てくるようになります。こぞって、やっぱり東京の自然はこういう人工物の中にあるんだっということを言いたくて、流域の子どもたちを連れて干潟に行つて、ごみの隙間にある生き物を取らせてるんですけどね。話題になり始めまして、東京の中流域の子どもたちに、ぜひ干潟に連れて行って欲しくて頼まれました。川崎市の方、神奈

川県側に干潟があるんですけど、干潟の真横にある小学校の子どもたちが、干潟に取り組んでますんで、じゃあ、東京の中流域の子どもたちを河口の子どもたちが迎え入れて、学習交流会をやるということになったわけですよ。東京の狛江というところの子がバスに乗って、ダーっと干潟に来たんですね。川崎の子どもたちは1年も学習やってますから、干潟のことをそこそこわかってる。ところが狛江から下りてきた子どもたちがですね。全員、変な物を持っている。

阿部：変なもの？

中本：こうやって。スプーンを持ってるんですよ。何に使うと思う？スプーンだよ？干潟ですよ？干潟に来るのに、みんな軍手とバケツとスプーン持ってきたんです。あれ、このスプーン何に使うんだろうと思ってたらね。干潟に連れて行つたらみんな、干潟はカニだらけですから、スプーンでカニ取ってるんですよ。

阿部：ハハハハ。

中本：スプーンでカニ取ってる。スプーンで取るか？みたいな。手だろ。

阿部：手で取るより難しいですよ。

中本：難しいですよ。でも、カニを手で取るという発想がないんですよ。総合学習の時間で行っていますから、前もって干潟の学習をして、先生もいて、先生と子どもたちで、じゃあ何を持っていこうかと相談してスプーン持ってきてるんですよ。つまり、先生も知らないんですよ。カニを手で取るということ。

阿部：わあ、すごい。

中本：とにかく、挟まれるということだけ知ってる。川崎の子ども、笑いました。狛江の子たちがみんなでスプーンで取ってるの見て、「あはは、あいつらスプーンだよ」って言ってますけど、こいつら最初に干潟に連れて行った時に、箸持ってきてるんですよ。

阿部：あははは。

中本：これ、笑い事じゃないですよ。本当なんですよ。箸を持ってくる。

阿部：へえ～。

中本：真横に干潟があつて、ここにはもう大変生き物が再生

してて、すごい状況であるのにも関わらず、入ったことがないんです。

阿部：やっぱり、経験してないってすごいことですね。

中本：行かせてないんですけどね、大人が。

阿部：豊田の矢作川はそれほどでもないんですけども、この前ね、ちょっと面白い話がありました。保育園の子どもたちと川遊びに行ったんですよ。ある女の子が「夏丸さん、空き缶拾った〜」。もう錆びた空き缶なんですよ。「それどうすんの？」って言ったらね、「うん、ゴミ拾ったから私エライ」って威張ってるんですよ。「ばか、それゴミじゃねえぞ」と。「手に持ってる網の中に、それをドボドボドボってやってごらん」って言ったんですよ。そしたらね、ドボドボドボってやると、ポロっとザリガニが出て来るんですよ。

中本：いるわな。ハゼの仲間とかな。

阿部：賢さん、多摩川っていう川に住んでるから、生き物がいかにゴミを使うかってよく知ってますよね。

中本：ねえ。生き物が使うことを狙って置いてるわけじゃないけどね。普通の人達が、川に行くじゃないですか。そうすると、やっぱりまず川に落ちてるゴミが目が行くんですよ。つまり、マイナスの物を見つけやすい。そうすると、なんてひどい場所だってことになっちゃう。

阿部：でもね、その子面白かったんですよ。それ見た瞬間にね、「あ、ザリガニのおうち」って言い出した。そのあとね、みんな網で魚を取ってるのに、その女の子は延々と空き缶を拾ってました。

中本：あはははは。

阿部：拾った数がね、20個くらい。中から15、6匹の獲物。ほとんど入ってるんですよ。ドジョウにモロコ、ザリガニも入ってる。大威張りですよ。保育園の子ども、網を持ってもなかなか取れないですから、「こんなに私だけ取った」って。空き缶が山になってるんですよ。でね、すげえなと思ったのは、先生なんですよ。それを見てね。保育園の先生は、「ああ、どうしましょう。私、今日ゴミ袋持ってこなかったわ」って。悩んでるんですよ。女の子と、「お前それ、ザリガニのうちだよな。どうする？持って帰って捨てる？」って言ったら、「だめっ、川に返す」って、全部返しました。

中本：ハハハハ、真実を知るとね。

阿部：でも、それって大事ですよ。

中本：大事ですよ。

阿部：子どもの方がうんと大人。それでね、もっとすごかったのが、それから1ヵ月後に、もう一度その子たちと川に行ったんですよ。その女の子は誰よりも先に走って、全部空き缶回収しました。これ、漁師ですよ。罟を仕掛けた。もう、漁師の知恵なんですよ。体験の中でちゃんと知ってるっていうのは。

中本：それは、やっぱり自分で発見したから楽しいんだろうね。

阿部：そうですね。

中本：自然に出て教わるとね、わかったつもりになっちゃうけど、やっぱりそうやって自分で発見しているところに、喜びがあるのかもしれないね。

阿部：そういう付き合い方って面白いですよ、やっぱり。

中本：ゴミは、多摩川でも矢作川でも、川の中にいっぱい落ちてるんですけど、鯉なんか黒系のビニールは大好きですしね。産卵所として使いますし。どうしても自然に出ると、ゴミにばっかり目がいっちゃって。どうしてもゴミ拾いの活動になるんですけど、実はそのゴミの裏側にある、野生動物がゴミとどう付き合ってるかということにいくと、その地域の環境というのが見えてきて面白いんですよ。

阿部：去年見つけたのはね、鯉がゴミ袋に産卵するのはよく知ってたんですけど、モツゴっていう魚は、プラスチックが好きなんですよ。ポリバケツとか。

中本：あのね。単管パイプ入れてみてください。モツゴの卵だらけになりますから。

阿部：そうですね。

中本：ガラスとかね、好きなんだよね。

阿部：子どもたちと、屋根瓦に自分の名前を書いて、川に沈めて置くんです。そうすると、3日もすればモツゴの卵だらけになる。それをバーンと割って、うちに持って帰って水槽に入れておくと、全部産まれるんですよ。面白いですよ。

中本：面白いですよ。多分皆さん、中部圏でその年齢までお生きなされたでしょうから、相当あちこちでやってるで

しょう。やっぱり子どもの時の原体験は大切ですね。たとえば遊びに行くと、危険なのか楽しいところなのか判断するかというのは、子どもの頃の経験がすごく大切だね。

阿部：原体験ということですよ。

中本：原体験ですよ。これは基本的には、理科の授業でも環境学習の学習でもなく、やっぱり子どもが空き缶の中から生き物を見つけるみたいなこと。子どもの好奇心がいろいろ体験を積んでいって、やがてものさしになる。僕は川遊びって30になってから始めました。それまで東京の浅草ってところで育ったんで、自然なんていうのは鳩とアリしか知らなかった。他の生き物なんて見たことない。そういうところで育って、多摩川で遊び始めたんですけど、地方の川に行くと、この川どうなのかなと見る時に、やっぱりどこか知らないところで、多摩川で作ったものさしを当ててるんですね。ここはこう違うって。そういう意味だと、体験をする、つまりいなすための原体験として、子どもらが地域の身近な自然と触れ合わなきゃいけないという気がします。

阿部：さっきのカニの話でも、まず手で捕まえて挟まれてみるってことですよ。

中本：そうだね。これはあとの話もあるんですけど、スプーンでやがて取れないってことわかるんですね。ところがカニは取りたいんですよ。はじめて動くカニを取ろうとしているわけですから。そうするとね、やおら軍手をはめ始めるんですね。軍手で恐る恐る取るんですけど、実はそんなに難しくなく、挟まれずに持てるんですね。ところが今度は軍手が泥だらけになって取りにくくなる。最後ね、やっぱ素手になるんですよ。それで、もうカニ取るのが面白くて、授業なんか何もない。ただ2時間、カニを取っておしまいって授業になっちゃったんですけどね。その中で、やっぱり子どものすごさって。昔の子と今の子って。実はそんな変わってなくて、面白い入り口をいかに見つけてやれるかなのなかっていうのが、キーワードになるような気がします。

阿部：僕もほんと同感で、今の子どもは遊ばねえって大人を見るとね、蹴飛ばしてやりたくなる。何も変わってないですよ。

中本：変わってないですよ。

阿部：ただ、その機会がないだけ。だから、川に連れて行けば、みんな子どもはね、昔の子どもと同じ顔して遊びますよね。

中本：そうですね。涌井先生の話にもありましたけど、高度成長の時に、日本の身近な山河が悪くなった時代がありました。その時に少年期を過ごした今の小学生のお父さんくらいだと、やっぱりほとんど自然体験がない。特に首都圏だと、僕今53歳で昭和31年生まれですけど、自然体験ないですね。隅田川には墨汁みたいな水が流れてましたから、身近な場所でありながら、まったく遊び場所としての価値がなかった。濃尾平野なんてのは、水との関わり合いの最も濃い暮らしをしてきた地域です。輪中や洪水と戦った跡が、各地でも遺構として残って、もしくは今も使われているんですけど、行くな、危ないって。離れていってしまったおかげで、川はほんとに身近にありながら、近くて遠い存在になってしまいました。それでなんかこう、大事なのは大自然、北海道とかシベリアにある川で、真横の川ってのはあんまり気にしなくなっちゃった。このへんのギャップを、夏丸さんは矢作川で、私は多摩川で、いろいろと活動しながら埋めようとしてるんですけど。

阿部：賢さんが今多摩川でやってる活動って。これは、

中本：これが難しい。やっぱりね、私立小学校じゃないんですよ。公立小学校なんです。公立小学校に通うのは地域の子どもですから、その地域がやがて故郷になる子ども達に故郷の水を知ってもらおうと思って、最初は学校に紙芝居作って行こうと思ったんです。そうしたら今から15年くらい前ですけど、小学校から、行っちゃいけないって場所の楽しい話は止めてくれと言われて、学校に入れてくれなかったんですね。それでやってる学習という、CODのパックテストを持ってきて、子どもらが先生と一緒に水採って、多摩川は当事汚かったですから、「これだけ汚れてる、汚い川ですね、なぜ汚いんでしょう」って言って、子どもらはみんなゴミ拾いで帰ってくる。待って、これをよく見てご覧。魚は奇形だけど、ものすごく再生してるんだよって、そこを見てくれない。どうも、地方からきた先生が地元の子どもらを連れて行きまして、お前の故郷は最低だっという勉強をするようにしか見えなかったんですね。

阿部：そういうの、僕も大嫌い。パックテストも実は大嫌い。ある時ね、学校の授業についていいたら、今からパックテストをやるって。みんなペットボトル持って行くんですよ。汗だーだー流して歩いてきて、水汲んで帰って。いこうとするのね。「ばかやろう、川にきて何を見てるんだと。この水はきれいか汚いか」という話をしたら、豊田市に住んでる子どもたちが、「汚い」って言うんですよ。何故かという、最初からパックテストをやるという形でくれば、子どもはばかじゃないですからね。おそらく汚いんだろうなと思いついて。でも、「いや違うよ。この水はね、触って、臭いをかいで、入って、飲んで、いい水か悪いかわかるよ」って、

僕が言ったら、「嫌だ」って。

中本：そんなことしたら、親が大変だよ。

阿部：絶対死んじゃうとか言うんですよ。でもね、ペットボトルを置いて、みんなパンツ一丁にして、入れって言って、川に入ったら、もう10分もしないうちにみんな泳ぎだすんですよ。

中本：子どもはそうだね。

阿部：豊田の子どもはバカばかり、みんな泳ぎだす。頭をつけてジャバジャバやってるのね。で、1時間終わって、「この川の水はどうだった？」って言うとね、自分の遊んだ川の水を汚いっていう子はいません。みんな「まあまあだった」「結構きれいだった」って。「じゃあ、水の味は？」って聞くんですよ。そしたら飲んじゃってるんですよ。それで「あ、まずくなかった」って。やっぱり、触ってみないと解かんないことっていっぱいありますよね。

中本：多摩川だと飲んだら大変なことになりますけど。

阿部：そうか。

中本：実は子どもらも流域の人間も、水道の蛇口から出る水をどっから採ってるんだ、それからトイレの水をどこに捨ててるんだということを、知らないんですよ。本当はもうライフラインとしては、一番基礎になっているのが水との関わり合いなのに、場所としての関わりがない。それを作るために多摩川でいろいろやったのをご紹介したいと思います。ちょっといいですか。これね、僕が紙芝居やっています、子どもを集めて。これ、小学校で「多摩川はすっげえ面白い場所だぞ」というのをみんなに教えたくて。別に環境活動だとか、何かりっぱなことをやろうと思ったわけじゃありません、面白いからやってただけなんですけど。

阿部：賢さん、これ不思議な場所なんですけど、どこなんですか？

中本：どこかわかる？ わかんないでしょ。学校に入れなかったもんで、床屋なんです。床屋は地域の子がきますんで、学校の学区で川が一番近いところの床屋で、流域の左岸と右岸と、4年かけて124回やりました。そうやってうちにね、見ている父兄が、学校でもやってくれよなんていうことでね、それで学校でもやるようになりまして、あとはあんぽんたんの校長を探すだけですよ。

阿部：あははは。校長先生が川遊びが好きかどうかって、大

きいですよね。

中本：もう、小学校は校長次第です。校長先生が持つてる権限は大きいですから。公立小学校ではね。それで、校長先生がじゃあちょっとだまされてやってみようかということで、授業中に、授業中にですよ、ライフジャケットつけて川に泳ぐっていうのを、初めてやったのが6年前なんですよ。一人あんぽんたんな先生がいたんですよ。なんかあったらその人終わりですね。私も終わりですよ。子ども流しちゃったら、でも、絶対危くないっていうのは自信持ってましたんで、連れていきました。

これ、紙芝居ね、こんどヒマなときにやりますけど、夏丸さんもよくご存知のように、下ネタ連発です。子どもの心をつかむのは下ネタしかありません。これ、川です。そうすると、お父さんたちも流域で育ってますが、川なんか入ったことない。汚いときに育ってますから。それで多摩川に連れて行きまして、やることは魚獲りと、さっき言っていました川流れ、川を泳ぐということをやっています。

こうやって泳がすんですよ。言っておきますが、多摩川のこのあたりだと水はほぼ全部下水処理水です。それを知っていると親が入れないんですよ。黙っています。上水は上で全部取っちゃってますから、東京都は。

これ、子どもらがみんな先生に水を掛けてますね。魚獲りがヘタな先生なんです。ヘタな先生はこうやっていじめられます。みんなに。ところが投網打つ先生なんかいたらもう、他の授業もばっちし上手くいく。やっぱり魚獲りが上手いというのは、子どもらにとってヒーローなんです。1年もやると、子どもらのほうが全然魚獲り上手いんですから、先生とかお父さんが日曜日に連れて行くと、子どもらが魚獲りを教えるっていう変な現象が東京では起きている。

多摩川塾というのを最近始めました。これは何かと言うと、僕らが1人1人ボランティアでやっても大変だということで、先生を僕にしちゃえ、魚獲りが上手い人にしちゃえということで、先生たちを集めて多摩川で遊ぶ学習を年14回くらい、これも全部ボランティアで、仲間とやっています。

やることは一緒。こういうことですよ。これ、二子玉川ですから、世田谷ですよ。そこで、こうやって流れて、水に流された時は、下流を向いてこうやって流れるんだぞっていうのを教えてるんですけど、たいがいこうやって遊んでます。先生たちも魚獲りなんてやったことない、ほとんど経験ありません。もう、地方出身でも魚獲りなんて30代はほとんどやってません。だから魚を獲ってみると、あまりにも面白い。2回目はこうやって自分の子どもを連れてくる。家族サービスの場になってきちゃうんですよ。困っちゃいますね。こんなコイが獲れたりなんかします。これはみんなで追ったんですけど、この先生なんか、背中に赤ちゃん背負ってるんですよ。

阿部：先生が赤ちゃん背負ってるのはすごいですけど、先生の顔が子どもですよ。

中本：そうそうそう。これね、奥さんが同窓会で行っちゃって。「子どもどうすんだよ、おれ多摩川塾があるんだよ」って言ったら、「あんたたまには見なさい」って言われて、それでも来たくて、背負ってきちゃったんですけどね。このコイをとった時、子ども半分以上埋まってました。

阿部：ハハハハ。

中本：「死んじゃうぞ、おい」って話なんですけどね。

これ、現在の多摩川流域の小学校の教室です。僕は、4年生の総合学習をやっています。3年だと体力がない。5年だとちょっとお兄ちゃんになって、ふーんとか言い始める。4年が一番いい。4年は子どものまんまで面白いことをやるし、体力もある。これ、4年生の多摩川の中下流域の川沿いの小学校です。ご覧のとおり、私を拒み続けていたくせに、今もう教室中全部川のもんです。もう子どもらは図鑑は全部持っていますし、ここにはちょっと写ってないですけど、こっち側の両方の壁に水槽があります。何よりもすごいのはですね、後ろの棚なんです。

ライフジャケット。いいですか。まだ地方に行ったら、良い子は川で遊ばないって教育委員会の旗が出てますよ。多摩川流域の小学校はね、教室の後ろのここにですね、体操着とか習字と一緒に救命胴衣が入ってる。で、国語でも理科でも、何かそういうちょっと川を使える題材になると、川に入らなくても川へ行く時は、ライフジャケットつけるっていうのが鉄則ですから。ライフジャケットつけて、10分でも20分でも川に行くと、草の勉強とかしてます。こういう、なんていうんですかね、50年間くらい消えてた川との関わりっていうのを、やっぱりこれは「今の子どもたちは…」ってことじゃなくね、何か仕組みとして作るのが大事なんです。ただ、ものすごく大変ですけど、必ず親が数人クレーム出ます。川に連れて行くと、あんなところで泳がすとか。そういうのも、やっぱり子どもらが魚獲りするのを見ると、びっくりしちゃうんです。あまりにも喜んでるから。

阿部：豊田でも、そういう活動をしていると、必ずやっぱりそういう反対者が出るんですよ。でも現場に来て、子どもの顔見たら、みんな何も言えなくなっちゃいますよね。

中本：そうなんです。おそらくこれだけじゃなく、高学年になると、今度はアユを飼育して学習したり。小学校の先生って、新聞に載るとすごいことらしいですね。

阿部：なんか嬉しそうですよ。いつも。

中本：そうそうそう。地方版、川崎版で載ったたりすると、なんか校長会で気持ちがいいらしいですね。

阿部：ああ、そうなんですか。

中本：どどん図に乗って、「中本さん、1年生はできないですか」って。「1年生は、草花やろう」って。今この多摩川流域の小学校では、ほとんど総合学習、地域の自然ということが多摩川をやっています。泳ぐのは4年から。それでこう、何かね、みんなの故郷の関わりっていうのができたらいいなと、あの子たちが僕らの年になった時に、初めてね、常識的な河川運営が生まれるんじゃないかなと期待してやっております。

阿部：でもね、その多摩川の小学校でみんなライフジャケット持ってるって、これはすごいですね。

中本：ライフジャケット屋、儲かってます、多分。ものすごい数、売ってますから

阿部：アハハ。

阿部：あのね、矢作川でも、やっぱり賢さんたちと同じようにね、地元の子もたちと僕は遊んでるんですけど、ちょっとその写真を見てもらいます。

中本：はい。

阿部：こんな感じでやっています。今回紹介するのは、学校の総合学習でもやるんですけども、それとは全く別。学習とはあんまり関係なしにして、親子で遊ぶ、とことん遊びます。地域のキッズプランナーっていう、やっぱり子育て支援のボランティアがあって、その方たちがとってもいいんで、一緒にやってるんですけども、こんな感じで、いつもずるずる始めます。頭にタオル巻いてるのが僕で、いつも言うことは、「子どもは流されてもいいけど、沈むな」それだけです。「お父さん、お母さんは、流れそうな子どもは下流で待てるよ」それだけです。あとはね、とことん遊びます。

もうね、5年間、半分以上が同じ子どもたちですので、遊び方も何も全部覚えていく。繰り返すことは大事で、1回こっきりのイベントというのは意味がないんです。だから難しいことは絶対やらない。そうするとね、ここで遊んだあとに、家族でまた来られる。そんなレベルの遊びをします。そうすると何度も遊んで、次の年来ると、もうちょっと顔つきが変わってるんですよ。最初のうちはわかんなくて、「どうやって獲るのかなあ」って言ってた子どもが、「おれ、知ってるぜ」みたいになってくる。そういう子どもの成長もとっても面白いです。だから、始めれば、ばーっと子どもたちは、川に散ります。

ライフジャケットで流れるのは、矢作川も一緒なんですよ。ただ矢作は、ちょっとすごいでしょ、ホームセンターで買ったタライを持ってくる子がいる。

中本：一寸法師ですね。

阿部：ええ。これ、もしよかったら多摩川でやってください。アハハハ。

中本：これ買わなくても、落っこってます、多摩川に。ゴミで。

阿部：ちょっと多摩川の現状を知りませんでした。

中本：アハハハ。

阿部：ただこれもね、今これに乗ってる子は保育園の年長さんなんだけど、小学校に入ると乗れなくなります。くるくる回っちゃって、みんな沈没する。僕はね、2時間3時間頑張ったけど、やっぱり乗れない。やっぱりちっちゃい子の方が乗りやすいんですね。

中本：なんでだろうね。恐がらないのかな。

阿部：あの、単純に重心の問題だと思うんですよ。これなんかはね、箱めがね。

中本：これ、カジカ？

阿部：箱めがねを使って、川底にいる魚を見ながら、1匹ずつ捕まえるという遊びをしています。矢作川ではね、テナガエビも獲れるし、ヨシノボリ、カジカ、ギギ、スナモグリ、いろんな魚が獲れるんで、これを始めるとね、大人もみんな夢中になりますね。ただ、これが終わった後は、大人はみんな腰が痛くて立てなくなります。

中本：これ、不思議だけど、やっぱり大人だから獲っても、ふふふとやるかと思うと、子どもと一緒によね。もう、特にナマズ、ウナギ、ライギョ、この辺が入ると、大体4本くらい切れるね。

阿部：おかしくなっちゃいますよね。

中本：あれは、子どもと全然変わらない。

阿部：だから、川遊びをしてなかったお父さん、お母さん、していたお父さん、お母さんってあんまり関係ないの。一番やっかいなのはね、魚釣りをしてるお父さん。「おれ、アユ

釣ってるんだぜ」って威張ってるお父さんが一番だめ。「なんだよ、オイカワかよ」って言うんだね。あれ、子どもの敵です。

中本：いや、それはね、味方ですよ。

阿部：味方ですか？

中本：とりあえずね、子どもの頃絶対やってる人ですから、地元でね、特に矢作なんて、他の川行かないで自分の川でやってるでしょ。いい川だから。だからね、子どもらが「おじちゃん、この川、すごいです」って言うよね。嬉しいんですよ。どんどん、味方になってくれると思いますよ。

阿部：僕は敵とは言ってますけどね、僕もアユ釣りもしますし、みんな味方ですけどね。

中本：やっぱ、入り口っていうのは大事だよな。

阿部：そうですね。とにかくね、みんな夢中になって遊びます。

これね、右下にいるの僕なんですけど、なんか寂しそうですよ。

中本：誰か流れて、搜索してるんじゃないか？

阿部：そうじゃない。あのね、イベントが大成功になると、僕は寂しくなるんです。誰も僕の近くにいない。みんな川に行く。これ成功なんですよ。

中本：そうだね。

阿部：僕はいつもそう思っています。町の方の、川で遊んでない子どもたちの初めてのイベントでは、大体子どもたちが僕の周りに集まってきて、「どうやって獲るの?」「これ何?」ってまわりついてくる。それはそれで楽しいんですけど、一番いい状態になると、みんな川に向かって、僕に背中を向けて、お父さんも、お母さんも子どもも一緒になって遊んでるけど、顔を見合わせてないですよ。みんな背中合わせになって真剣になってる。あれがね、僕は川遊びの一番の魅力だなと思うんですよ。

中本：矢作は、玉砂利じゃないから滑んなかったりして子どもが入りやすいよね。

阿部：そういう意味では、とても遊びやすい川ですね。特に僕のいるところは、下流域ですので、砂だからね。やっぱり楽しいですね。

僕のやることといたら、「夏丸さん、こんな変なの獲ったんだけど」っていう子どもにね、「すげー、おまえ天才だー」って言って、誉めてやることだけ。とにかく誉めるだけ。「すげー」って。何が出てきても。これはね、実は僕、昔賢さんの「Let'sドンキホーテ」って番組見て、「あ、この人本物だ」と思って。それで何か盗もうかなと思った時に、賢さんの「すげー」っていうのを盗むことにしたんですよ。

中本：アハハハ、いやいや。

阿部：当時、バカなこといっぱいしてましたよね。

中本：悪かったな。あんたに言われたくないよ。あんたの方がよっぽどバカだろうよ。

阿部：僕の記憶によくあるのはね、僕の家ちょっと離れたところにある境川っていう、あそこに入るのはかなり勇気があるでしょうっていう川に入って、大喜びでウナギ獲ってましたよね。

中本：境川は面白いですよ。尾張と三河の境でしょ。方言が違うんですよ。豊橋と三河側のどこかの都市では、橋の真ん中で街灯の電気代も割り勘にしてるんですよ。知ってます？ほんと、移民で都市になってる東京と違って、やっぱり、三河とか尾張はね、昔から都市ですから、本当にね、昔いかに境川を境にして、三河の子と尾張の子がケンカしたかって話ばかりなんですよ。これ、関東じゃねえな。文化も自然も本当に面白い。

阿部：僕も子どもの頃、川で川向こうのやつらとは見たら石投げるのが礼儀だったですからね。とにかく、そういう場所だったですよ、この辺は。それで両方とも強烈に郷土愛、持ってるでしょ。好きなんですよ。

中本：いやー。そうですか。やっぱり子どもの頃にこういう原体験してる人っていうのは、大人になって、今のぼくらとはずいぶん変わったことになるでしょうね。

阿部：そうかもしれないですね。でね、話を戻しますがけれども、この子、「すごいなー」ってやるとね、ちょっとにこっとする。でね、この中を見て下さい。箱めがねに生き物が入ってます。いいでしょ。

中本：黒子だね。ウナギだね。

阿部：女の子、よくわかんない。「変なの獲った」って持ってきて、これ見たらなんて言うかわかりますよね。「すげー、ウナギだー」って大声で叫んでやる。そうすると、みんな

わーっと集まってくるんですよ。

もう女の子は一躍スターになって、お母さんたちがわーっと集まって、「矢作川ってウナギがいるんですか」って。みんな知らないんですよ、ウナギがいることも。「ウナギってあの蒲焼にするウナギですよ」って、当たり前じゃないですか。でも、みんな知らない。「本当に食べられるんですか」って。「いやー、この川のウナギはね、僕はひと夏に50本くらいとって、全部自分で食べてるから、ウナギなんて食べたくない」ってちょっとホラ吹くんですよ。そうすると、みんな目がきらきらして、「すごいですね、こんど獲りにこよう」って言いながら、ちょっとこれ見て下さい。僕の周りに集まっているのは、みんなお母さんなんですよ。これ、お父さんもいるんですよ。同じ数だけ。お父さんどうしているかという、子どもがウナギ獲ったもんだから、「おれも獲ろう」って言って、みんな獲りに行っちゃってる。

中本：ありがちなね。

阿部：ひどいお父さんになると、お母さんに「あんた獲ってらっしゃい」なんて言われて、ウナギを獲りに行く。

中本：あれは蒲焼にできねえな。小さすぎてな。

阿部：アハハハ。ちょっと小さいですよ。

中本：でも、嬉しいね。

阿部：これ面白いですよ、お父さんとお母さんとずっと川遊びやって気が付いたことなんですけど、女の子は必ず魚を獲った後に「夏丸さん、これ食べられますか」って聞くんですよ。「おいしいですか」って。ところが男の子は絶対言いません。男の子は持ってきて、「夏丸さん、これ珍しい？」。これ、ほんと不思議ですよ。

中本：なるほどね。

阿部：東京はそういうことはないですか？

中本：食べられるかって多摩川で聞かれたことはないな。

阿部：あ、そうか。

中本：誰もが食べられないと思ってますからね。

阿部：そうか、そういう意味では、矢作川はまだ幸せだな。

中本：今の夏丸さんの話ですごいのは、釣りなんかは、「釣りバカ」でもそうなんですけど、インストラクターの方がいて

ね、釣りの道具をそろえてもらってやるんですよね。海釣りでも川釣りでもそうですけど、釣りをやると必ず、外道っていう種類の生き物がいるじゃないですか。初めて釣りやる人に、「あー、これフグ、外道だ」ってパーンってやられるとね、この人、やっぱりフグが一生価値のない魚になっちゃうんだね。ところが子どもらはほんと、誰でも獲れるテナガのちっちゃいのとかでも、獲れて「わあ、すごいなー」って言ってやると、そのテナガはもう一生忘れられない生き物になる。やっぱりその身近な自然で遊ぶ時に、その入り口に立つ人の立場っていうのはすごく大きいんですよね。

阿部：大きいですよね。魚に変な価値観を植えつけないことは大切な事だと思います。

これは自分の獲った獲物を上から眺めて数を数える後ろ姿。10匹獲ったぞ。ただね、その10匹獲ったぞーの水槽を、ひょいと上に持ち上げてやる。そうすると子どもの顔が変わるんですよ。

中本：これ何の魚？ ギバチ？

阿部：それは、ギギです。

中本：普通のギギ。矢作は上から落ちてくるんだ。あ、ごめんなさい。専門的な話をしてしまいました。

阿部：上から見てると数だけ数えて満足するんですけども、それを目の高さまで持ち上げると、あっと気が付く、面白い。

中本：吸盤がついてたりね。

阿部：こんなヒレしてる。こんなヒゲが生えてる。目が一瞬にして変わる。もう理科の目になるんですよ。僕たち大人ができるのはね、偉そうに魚の名前を教えたりすることじゃなくて、こういうふうに、ふっと見せてやること、そういうことじゃないかなと、子どもたちと遊んで思うようになりましたね。

で、水槽に入ってる「きれいだね。かわいいね」って言うていた魚がね。バケツにあると、一瞬にして食材になる。

中本：矢作はすごいなあ。

阿部：これすごいですよね。矢作の下流なんですけど、セイゴまでいますよ。これ。

中本：ほんとだ。

阿部：アユもいるし。

中本：カマツカもいる。美味しい魚がいるね。これはオイカワだね。

阿部：でもね。アユが美味しいとか、あんまりどうこう言わない。全部魚はこうしちゃいます。ジューツ。

中本：腰引けてるね。

阿部：お母さんたちも慣れたもんでね。これ、魚ゼーンぶから揚げにしてくれます。

中本：ふーん。

阿部：で、子どもたちとむしゃむしゃ食べる。そうすると、こういう笑顔が生まれる。

中本：涙が出てる。

阿部：エヘヘヘ。

中本：水？これ。

阿部：僕は川で遊ぶことについてね、知識とかそういうのもあるんだけど、やっぱり生き物と触れ合うことを子どもに教えるのが、大人の務めだと思う。多摩川ではどうかもしれないけど、矢作の魚はまだかろうじて食べられる、だったら見せてあげたい、感じさせてあげたいという気持ちでいますね。一番、何でこんなことをやるのかと言うと、さっき賢さんの話の中にも出てきたんですけど、故郷感なんです。今ある川が、子どもの故郷なんです。大人が話をすると、故郷の川はきれいで、もっとどうのこうのっていう話になるんだけど、いくら薄汚れていても、子どもたちが今見てる景色そのものが彼らの故郷だと僕は思う。だから、今ある彼らの故郷を、コンクリートで固められているから駄目だとか、絶対言いたくない。だから僕は、やっぱり賢さんと同じようにどぶ川でも入って、そこにいる生き物を見せて、面白いっていうことをね、感じさせてやりたい。そうするとね、彼らはきっと、50年も後になって、僕が死んだ後ですよ。偉そうな顔してね、「わしは、昔あの田んぼの脇の川でね、ドジョウ獲った」だって、威張れるんですよ。今のおじいさんたちが威張っているのと同じように、だから、今あるものをそのまま見せてやりたいんです。きれいにするのも大事だけど、まず今川に入ってみるっていうことの大切が、僕はその辺にあるんじゃないかなと。

中本：でもきっとね、子どもたちは川を見てるんじゃないで、夏丸さんを見てるんだよね。

阿部：川で遊んでると、みんな僕に背中向けてるんですけど。

中本：入り口になる人がそこを好きだっていうこととか、楽しいと本当に思ってるってことは、すごく子どもには伝わってるんですね。時々子どもを忘れてたり、川で撮影することになったりすると、気が付くと後ろにカメラがなかったり、そういう変なおじさんが川にどンドン入っていっちゃう姿を通じて、子どもたちの中に地域の自然というものの価値観が生まれるような気がするんですね。

阿部：そういう意味で言うと、やっぱり大人の意味っていうのはとっても大事ですね。だから僕が今一生懸命やりたいのはね、たくさん変な大人を育てたい、仲間を作りたい。たとえば賢さんみたいな方が矢作川に30人いたら、これまた川が変わるんですよ。やっぱり、本当にばかみたいに川が好きなおじさんがいっぱい出てくると、子どもたちが変わってくると思うんです。

中本：涌井先生の話にもありましたけど、もうそういう時代になりましたよね。ちょっと控え室でお話させて頂いた時に、やっぱり昔の環境活動というのは必ず敵がいてね、非常に組織としてまとまりやすかった。でもこれからの環境活動というのは、敵がない。誰かが悪いんだということでは、環境意識全体のマジョリティとしてあげていくにはね、もう無理だという話を聞いてね。やっぱり「人」なんだなっていうことはね、すごく感じるんですよ。僕が本を出した時に、よく読者の方がお返事くれるじゃない。いっぱい来たのを全部見てみたら大体ね、30代、40代のサラリーマンなんですよ。買ったのが、子どもじゃなくて、賢さんみたいになりたい、ってやっぱり書いてるのね。芸能人だからね、もっと他のことで憧れて欲しいんですけど、誰でもできることを、網持ってたただ楽しくやっていると、俺もやりたいっていう声がすごく多かったのね。これはもう経済成長で、国民みんな同じ価値観持って生きていられた時代じゃなく、価値観をそれぞれが自分で生まなきゃいけない時代に入ってる、多分。そうじゃなきゃ、夏丸さんもおれもね、こんなとこ座ってないですよ。ただの変人なんです。多分一緒だと思うけど、川行って、おれ、何回通報されたか。

阿部：僕もです。

中本：「死体が浮いてる」って。泳いでるんだ、ばか。多摩川で魚見るとね、大体通報されるんですよ。

阿部：僕はね、大体怪しいところに網持って入っていくと、泥棒と間違えられますね。パトカーが来ちゃう。

中本：水産価値ありますからね、アユがね。

阿部：アユじゃなくて、野菜泥棒と間違えられるんですよ。

中本：野菜泥棒。本当は盗ってってんでしょ。

阿部：いや、盗ってないです。

中本：帰り道に2、3個。こう。

阿部：いやいや。

中本：うそー。ほんと。

阿部：でも、そうやって、やっぱり大人も川に入っていかなかちゃいけない。そういった意味でね。ちょっと、次の写真見てもらえますか。

これね、実はCOP10の事業として愛知県下に10個、メダカとかドジョウを田んぼに上がらせてあげようという水田魚道を作ったんです。その一つが僕の家で。

中本：あ、左にあるの魚道なの？

阿部：そう、これ魚道なんです。これ位のプラスチックのパイプにこういうふうになって、よくできてるんですよ。棧ができて、こういう蛇行した水路ができるから、落差のある田んぼの上まで生き物が上がる。これを作る時に、地元の人なんか「こんな上がらねえだろう」って言うんですけど、いや、上がるなと思ったら、案の定すごく上がりました。

中本：でもこれ変だよな。こんな用水路に魚道がついてるっていったら、普通驚くよね。

阿部：これを作っちゃうと自体が明らかに怪しい景色なんですよ。

中本：だろうな。

阿部：でも、僕、ここで作るんだけど、なんかアドバイスくれますかって聞かれたんです。僕は、この魚道のことはどうでもいいんだけど、面白いことに、これを今回やったのが、愛知県の農林水産事務所と豊田市の土地改良区だったんですね。僕は、この魚道以前に、この水路にすごく前から不満があって、

この下流にはこんな段差がある。これ、メダカ上れますか？

中本：無理だね。

阿部：ですよな。とてもじゃないけど上れない。しかも、そ

の下流を見て下さい。

コンクリートの3面張りです。幅4メートル、大雨がきたらみんな流されます。僕はこの川に入って、メダカがどれだけいるのか、春に全部調べました。そしたら、1キロの間に30匹です。これはつらいぞと。ただ、その1キロ下流に下ると、これだけ草が生えて、

中本：ガサガサがちょっとあるんですね。

阿部：ここでガサガサやると、一網で50匹メダカが入ります。ただ、あの草のない所には全然行かない。魚は棲みやすいところを良く知ってます。その水田魚道を作る前に、土地改良区にメダカの話をして、草を植えさせてくれと、草を入れたら生き物戻らんじゃないか、と言いました。でも首を縦に振りませんでしたね。

中本：そりゃ、嫌がるでしょう。

阿部：おそらく、首を振るところは日本中どこ行ってもないでしょうね。土地改良区にとって、草は敵ですから、なんともならなかった。

ところがね、僕はもう土地改良区の上の人にいくら話しても無駄だなと思って、半分諦めてたの。ところが、これ右上にいるのが農林水産事務所の方で、ここの担当者です。左下が土地改良区の方、担当者です。

中本：喜んでるね。

阿部：喜んでるでしょ。あのね、まず最初に川に入ってもらったの、子どもと同じように、メダカがいることを見てもらいたかった。上の方の方を連れて行って、一緒に遊んだんですよ。メダカとって、そしたらね、最初は僕は怪しいですから、ちょっと警戒してたみたいなんだけど、メダカ見てるうちにね、なんか顔つきが変わってきて。

こんな卵を持ったメダカを見た時にね、彼が立ち止まったんですよ。流れの脇でメダカ見つけて、こうやって網持ったまま、動かなくなったんですよ。「あれ、この人なんか考えてる。メダカと生き物見てなんか考えてる。ひょっとしたら」ってちょっと期待してたら、すごいことが起きたんです。

おそらくね、僕には言わなかったんですけどね、苦労されたと思うんですよ。それでここに草を植えてもいいよという許可を取ってくれた。で、ここに集まったのが草植え部隊なんです。これもね、僕は、川はつながっているから、ここは土地改良区の管理だけれども、下は市の河川課が管理してるから、市の河川課に電話して、県の河川課にも電話して、いろんな方に電話したらですね、すごいですよ、みんな集まってくれた。地元の川好きの親子もいるし、矢作川研究所の方もいるし、いろんな方がね、みんな集まって、ここにすごく

原始的な方法で草を植えたんです。

これ、下流部にある草です。大変な仕事でした。スコップで草を泥ごと取って、上流へ運ぶ。軽トラに何杯も運びました。1キロですからね。

こんな感じで、もう、「大水が出たら流されちゃうよ」なんて意見もあったんですけど、この時に、よそから持ってきたきれいな草を植えるんじゃないかって、地元で踏ん張ってる草だったら、絶対付くって信じましたね。「地元で踏ん張ってる草だから絶対大丈夫」って言ったら、見事にその年の秋、2ヵ月後ですね。こんな風になりました。こんもり小山ができた。

中本：怪しい場所になったね。

阿部：ちょっと怪しい場所ができました。全体で見たらね、どうってことないんです。でも、これだけのものがいかに生き物に影響を与えるかっていうのが、みんなに見てもらいたかった。でね、こうなったらガサガサ、ちょっとやれますよね。で、やっぱり子どもたちを投入しました。

中本：そのガサガサで皆殺しだな。これ。

阿部：メダカ皆殺しです。だって、僕はもう乱暴ですから、もともと30匹しかいなかったメダカです。「どんだけ死んだっていいよ。お前ら、獲れー！」って、もう皆殺しです。でも、子どもたちすごいですよ。こう歩いていくと、速度が変わるんですね。草のあるところには生き物がいるっていうのをみんな体験としてわかってるから、草のないところは素通りして歩きます。

で、この1キロの間を上流、中流、下流と分けて、3つのデータを出しました。上流部はまだ草を植えてないんです。で、出た数字がこんな感じ。一番上にメダカの数字が書いてあるんですけど、春に全域を調べて30匹だったメダカが、草を植えただけで、下流域が320匹。下流域っていうか草を植えたあたりですね。それから、中ほどが230匹。上流部で40匹。だから、もともと草が1本もなく、30匹しかメダカがいなかったところが、600匹近くに増えるんですね。よく総合学習で、メダカは小さくてかわいい、弱い魚だっていうんだけれども、ぼくはメダカって最強の魚だと思ってるから、この数字を見た時は、みんな腰が抜けましたね。やっぱり。ただ、こうやってなんとなく大人も子どもも川と関わっていく中で、生き物を見る視線ができるよね、一度川に入って遊んだ人はみんな、仕事の途中でもなんでも川に立ち寄って覗くんですよ。

中本：うまいことやったね。

阿部：今まで誰も覗かなかった水路を、いろんな人が覗く。

中本：これはやっぱり、認めてくれた地権者の方と、土地改良区の方がすごいな。

阿部：ほんとにそうだと思います。

中本：ここは、生き物がいる必要のない場所だからね。

阿部：そういう意味ではね、ぼくは水田魚道についてはこれからだと思うんですけど、今回土地改良区の人スタートとしては、素晴らしいことをやったなと。でね、次の写真見て下さいよ。さっき生き物が上れない段差が水路にあったでしょう。これをね、土地改良区の人と、農林水産事務所の人がこんな風に直したんです。見て下さい。

中本：おお、魚道だ。

阿部：魚道ですよ。

中本：上がれるようになったんだね。

阿部：農業用水路に魚道が完成した。しかも、この魚道を見て下さいよ。あのね、アユの遡上と違って、メダカとかそういったものっていうのは、とても大変なんです。だからもう、凶面の段階で練りに練って、

中本：ずるいね。面白そうだね。

阿部：僕もその凶面を持ってきた時にね、この担当者の方、遊んでるなーと思いましたよ。

中本：真剣にやれるもんね。

阿部：すごいわくそそう。こうやったら、ここに石を置いたらメダカはどう動くんだろうって。すごく愛情を感じる魚道なんですよ。階段式のコンクリートとは違って、すごくいろんな生き物のことを考えて、僕はね、「日本一だな」と思っています。

中本：土手に桜を植えることよりも、こういうことの方が未来があるな。

阿部：そうですね。だからそういった意味でもね、きっかけとなったのは、僕はメダカだと思いたいから、大人もやっぱり川に入ってみることっていうのはとっても大事なことなんだな。特にこういうことのできる河川管理者といわれる人には、子どもと同じ視線でもう一度川を見て欲しい。そういうふうには、今本当に思っています。

中本：20年前、30年前じゃ、絶対こういうことはありえなかったでしょうからね。そういう時代になってるのかな。だけれどまだ、矢作川水系だと川をきれいにするっていうのは3面張りにするということがある、どうしてもね、まだ農業が自立してるから、利水という側面がある。多摩川なんかだと田んぼがないですから、親水っていう観点しかないですけど。まだ明治用水も含めていろいろ農業を支えている地域でこういうことができるというのは、多分すごいことだと思うよ。

阿部：ですよ。そろそろ時間もかなり過ぎちゃったので、まとめましょう。

中本：いかがでしょうね。「流域で守る生命の豊かさ」、実感としては、流域の方々もしばらく川から離れてるから、子どもも大人も身近な自然にちょっと疎くなってしまっている。生命も大事ですけど、その川が大好きでしようがない変なおじさんも守って頂きたいなと思います。

阿部：そうですね。多摩川も矢作川も同じ都市河川ですけど、自然の豊かな川じゃなくて、都市河川ならではのいいところをどんどん見つけていきたいですね。

中本：ぜひまた、みなさんの地域の自然とたくさん関わりを作って、まずご自身が好きになること、多分それが最初の入り口だと思います。子どもたちが川や山、流域の自然に関心を広げるためには、やっぱりまず最初にご自身がそこを好きになるっていうことが大きなきっかけになるような気がします。みなさんのちょっと前で我々2人、今後も矢作川と多摩川で頑張ってまいりましょう。

阿部：頑張りましょう。

中本：ご清聴ありがとうございました。

阿部：どうもありがとうございました。

— 休憩 —

○司会 次に、パネルディスカッション「流域でまもる生命（いのち）の豊かさ」に入りたいと思います。壇上の皆様をご紹介致します。先に、パネラーの皆様です。矢作川漁業協同組合長で、矢作川研究所運営協議会副会長の新見幾男様、ため池の自然研究会・NPO法人「みたけ・500万人の木曾川水トラス」の大沼淳一様、三河淡水生物ネットワークの浅香智也様、伊勢・三河湾流域ネットワークの丹羽健司様、以上4名の皆様です。コメンテーターは、先ほど講演頂きました、涌井史郎様をお願い致します。コーディネーターは、豊田市矢作川研究所の洲崎燈子が担当致します。それでは、

ここからは洲崎さんにバトンタッチしたいと思います。

○コーディネーター（洲崎） 今日コーディネーターを務めさせていただきます矢作川研究所の洲崎です。よろしく願い致します。先ほどは涌井先生のご講演、そして中本さんと阿部さんのご対談では、「Think Globary, Act Localy」「地球規模で考えて、地域で活動しよう」という言葉がありますけれども、本当にその両方をカバーするような内容をお聞かせ頂いたと思います。このパネルディスカッションでは、山川里海のつながりから成る流域で生き物と向き合い、生命の豊かさを守るために、私たち1人1人に何ができるか、ということをお話し合っていきたいと思います。

今日のパネルディスカッションの流れを、ここに簡単に紹介させていただきました。ここで、「生物多様性」という言葉を先ほど涌井先生からもご紹介頂きましたけれども、この言葉はなかなかイメージが掴みにくい概念であるということ、今回は「自然との付き合い方」という言葉をキーワードにしてお話をしていきたいと思います。先ほど「作法」という単語が出てまいりましたけれども、今、農林水産業に携わる生業者、一般市民、そして行政、研究者、様々な立場の人達が、もう一度自然との付き合い方ということを考え直さなくてはいけない時期に来ているだろうと思います。自然との付き合い方が上手になるということが、生物多様性を守ることにつながるのではないかと、いう考え方です。先ほど、メダカという生き物の逞しさを、対談の中で紹介して頂きましたけれども、身近に当たり前にたくさんいたメダカのような生き物が絶滅危惧種に追い込まれているような現状があります。こうしたことは、やはり自然との付き合い方がまずかったことの結果でしょう。多くの里山の生き物が同じような理由で、大きく数を減らしてしまっています。過度な利用でもなく、放棄でもない、適度な利用ということをどう実現していけばいいか、身近な自然に生きる生命を守るために、どうやって自然との上手な付き合い方をしていくか、こうしたことを今日は考えていきたいと思います。

伊勢・三河湾流域では流域を視野に入れて、様々な自然保全活動が行われてきました。ところが意外と同じ地域にいても、お互いを知らないことが多いということで、このディスカッションの場でご紹介頂きたい。そして自然と上手に付き合い、住民による持続可能な流域づくりを実現して、生命の豊かさを守るにはどうすればいいか、ということに関してアイデアを出し合いたいと思います。

まず、私とそれから新見組合長の方から、矢作川での取り組みをご紹介します。そして大沼さんから木曾川、浅香さんから豊川を中心とした取り組み、丹羽さんからは伊勢・三河湾流域ネットワークの話の全域的な取り組みということについて、お話を頂ければと思います。ディスカッションでは、まずパネラーの皆さんに、自己紹介をして頂く、それとともに今日のディスカッションのキーワードである「自然との付

き合い方」ということに関してひと言、それぞれのお考えをお話し頂ければと思います。

それでは、私の方から、矢作川流域についてご紹介していきたいと思えます。ご存知のように矢作川というのは、源流域に長野県、岐阜県の一部を含み、愛知県の中央部を流下している幹川流路延長118 km、流域面積1,830 km²の河川です。おおよそ、西三河地方と呼ばれる地域が大体ここに含まれることとなります。流域の7割は森林です。矢作川の大きな特徴が、河口から34 kmから80 kmの範囲に農業、工業、上水道、発電用と、7つものダムがあるということです。平均水利用率は、過去30年間で4割を超すというような非常に高い数値になっています。そして矢作川流域というのは、昔から多くの流域住民が、川の環境を良くするために一生懸命活動していた地域です。その歴史は約100年前に遡ることができるのですが、明治用水が通水開始した明治時代には、先ほど涌井先生のお話にもありましたように、山の木の伐採が非常に過度に行われていて洪水被害や土砂災害が絶えなかったということで、明治用水が最上流の長野県の根羽村に水源林を造成しました。時代は下って、高度経済成長期の日本中の川が大変汚れていた時期に、沿川の農業・漁業団体や自治体などが中心となって「矢作川沿岸水質保全対策協議会」、略して「矢水協」が設立され、全国で初めての水質汚濁防止法による摘発を行いました。その後、矢水協は流域内での一定以上の規模の開発行為を必ず矢水協に届け出る、また上下流の住民たちが交流する矢作川方式というものを、この地域に定着させました。さらに時代が下って、生態系に配慮した工事を行う近自然工法、これも全国に先駆けて矢作川で導入されました。16年前には、今私たちがおります豊田市矢作川研究所が設立されました。研究所の活動に関しましては、お手元の配布資料のパンフレットをご覧頂ければと思います。そして、1996年には、豊田市の水道料金、1トンあたり1円を加算して、そのお金を積み立て、上流域の森林整備に当てる水道水源保全基金が創設されました。

ざっと見まして代表的なものだけでも、これだけ様々な取り組みが今までなされてきた流域であるということが言えます。ただし、矢作川流域もたくさんの問題を抱えています。先ほどお話ししましたように、水が流れ、砂を運んでいるべき川が、7箇所ものダムで堰き止められてしまっている。これは矢作川の最上流・最大規模の多目的ダム、矢作ダムの堰堤の風景です。このダムがあることで、だんだんと川が変わってきました。元々砂河川と言われ、たくさんの砂が河床と河川敷を覆っていたはずなのに、その砂が流され、供給されない川になり、こうした髪の毛のように長い藻であるとか、特定外来生物になっているカワヒバリガイが大量発生するような事態が起きています。そして、アユを代表とするような回遊生物の往来も、もちろん阻害されています。また、元々護岸のために植えられていた竹林が、川が動かなくなり、竹の利用もされなくなったことで、こうやってジャングルのような

になってしまっている、こういうような川の風景が変わってきたという問題があります。一方で、源流域の森林荒廃の問題があります。矢作川流域の7割は森林ですけれども、その半分がヒノキやスギの人工林です。国内林業の低迷によって間伐などの必要な管理がされないために、山は荒れ、暗い林の中には植物が生えず、緑のダム機能や土砂災害を防ぐ機能などが、下がってきていることが懸念されています。先ほど、畠山所長の話にもあった10年前の東海豪雨時には、最上流の矢作ダムをこのように流れ出した流木が埋め尽くすという事態が発生しました。

こうした流域の問題に対し、矢作川というのは、研究者や住民、行政といった様々な立場の人が垣根を超えて共同で調査をしているという取り組みがあります。その中で、今日は2つを紹介します。まず、天然アユの生態調査ということで、アユをはじめ豊かな水産資源の復元をめざして、地元の魚釣り愛好家や漁業関係者による矢作川天然アユ調査会、そして豊田市、中部電力、矢作川漁協などの協働による調査研究が1994年から継続されています。1999年には、アユの保全のための長期的な対策、短期的な対策を含む16項目の提言を行なっています。そして2000年からは、アユが赤ちゃん時代を過ごす河口域や海域の調査も実施されています。この写真にあるのは、暑い夏も、寒い冬も川の中で調査をしているアユ調査の実働部隊、天然アユ調査会の、川とアユのことを話し始めたら止まらない元気なおじいちゃんたちです。そして次に、「矢作川 森の健康診断」という取り組みが2005年から始まっています。矢作川水系で活動する森林ボランティアたちの作った、「矢作川水系森林ボランティア協議会」、略して「矢森協」、さっき矢水協というのがありましたけど、これは矢森協です、ここと地域の森林研究者が手を組んで、一般市民に参加してもらい、人工林の健康調査をする森の健康診断を行っています。こうやって、矢作川流域のほぼ全域を5年間で診断しました。そして、流域の人工林の5割から7割が間伐遅れであるということも、これまでに確認しています。このような異なった主体による協働調査が今まで行われてきている。これが矢作川流域の住民活動の原動力であるのではないかと、そして全国で唯一、川の研究所として、矢作川研究所が存在できる理由なのかなと考えております。それでは、長くなりましたけれども、新見さん、引き継いでお話をお願いしたいと思います。

○新見 矢作川漁業協同組合の組合長の新見と申します。いつもは豊田市の矢作川流域でシンポジウムを開いておるわけですけれども、今日は矢作川の方からバス1台に乗って、たくさんの方に来て頂きました。今日は名古屋でやりますので、他流試合に出てきたような気分が緊張しております。矢作川の状況について、今洲崎燈子さんからお話がありましたけれども、私は漁業関係のお話を中心にしたと思っております。矢作川の方はよくご存知であるわけですけれども、矢作川と

いう川は、今日天竜川の方も来ていらっしゃいますけれども、天竜川のような大河川と違って、中規模の川です。僕らは天竜川なんかへ釣りに入りますけれども、やっぱりちょっと恐いですね。大きな川で恐いですけれども、矢作川の場合は比較的やさしい、中規模の一級河川です。それで自分の裏庭でも管理するような気持ちで管理してこられた、そういう川だと思います。最近にはさらに水量が減って、ちょっとやさしくなりすぎたなという感じですが、全長118 kmの河川の中流から下流部にかけて、約50 kmの漁場を持っております。しかし、先ほど洲崎さんの方からお話がありましたように、半分はダムの底です。ちなみに矢作川水系には全部で35のダムや堰堤があるそうです。

私は9代目の組合長です。1902年に漁業協同組合が創立されて、今108年目ですけれども、私が9人目です。長いこと漁協の役員をやってきました、これでもまもなく73歳になりますので、今年の3月で退任を致します。漁協の方のことを申し上げますと、私たちは今でもよその川に釣りや視察に行きますし、よその漁協の方が矢作川を視察にも来られますけれども、そういう経験から言うと、多分矢作川漁協というのは、全国で一番面白い漁協じゃないかなと思っております。夕べも月例の理事会をやってきました。20人位の会合で、理事の皆さんと支部長の皆さんがご出席なさいます。僕は最近驚いておるんですけれども、非常によくしゃべられる。発言が多いです。案外、みんな自由に発言されておって、面白い話をいっぱいして笑ったり怒ったり、すぐ怒る人が案外多いんですけれども、私の組合長の立場で言うと、組合長がこれはどうしても実現したいと思って、私は今任期6年目ですので、6年間かかって実現したいと思ってきた、提案してきたことでも、平気で否決なさるし、そういう意味では大変皆さん自由にやっておられて、議論が活発だということで今の矢作川ができてきたなと思っております。

私たちが一番思い出深く、またこれから付き合っていくかなきゃなんらと思っておるのは、矢作川研究所です。豊田市に矢作川研究所というものができた。1991年に豊田市が漁業団体や農業用水団体や官庁の方を含めて、ヨーロッパへ川を見て来いということで派遣してくれた。するとドイツのドナウ川の支流にイン川という川があるんですけれども、そこに日本でいうと当時の建設省の直営のような博物館で、イン川博物館というのがあった。そこを見て「いいなあ、これはいいなあ。しかし博物館よりは、研究所が欲しいなあ」ということになって、帰ってきてすぐに当時の加藤正一市長のところに報告に行きました。「こういういいものを見てきたよ」というような報告をしたら、「そんなにいいものを見てきたのなら、それだけでお前たちを外国まで送った価値があった」と言った。そして「どうして欲しい？」と言うから、「僕は博物館よりは研究所が欲しい。矢作川研究所が欲しい。1本の川に1つの研究所がなけりゃいかんという感じになって帰ってきました」と言ったら、「作ればいいがや、金だした

るで」と。それで、「作れ、その代わりに、お前たち自分で人は探してこいよ。人は出せよ」ということでしたので、それを引き受けました。

研究者はどこかで働いている人を雇わなきゃしょうがないわけですが、第3セクターで作るという決議をして、私が行きがかり上、初代の事務局長を引き受けました。非常勤ですが、常勤の研究員のみなさんと一緒に働かなきゃいかんという、非常にやっかいな立場だったわけです。それで、研究所がその3年後にできるわけですが、その2年後に矢作川天然アユ調査会という民間の団体ができました。これは調査を一手に引き受けておる民間の釣り人中心の団体ですが、研究所と調査会が組んで大仕事をやっておってくれます。今、研究所ができてよかったなと思っておるのは、いろいろ、先ほども発表がありましたけれども、成果が出てきておる。それはいいことに違いないですけれども、今僕らが思っておるのは、研究所ができて農業用水団体だとか、中部電力だとかいう人達と話ができるようになったというのが一番良かった。その前は、会えば喧嘩ばかりやっておって、どうしようもなかったんですけれども、それは共通の言葉がなかったということだろうと思います。研究所が通訳してくれるようになった。研究所が出したデータで話をする。そうすると、矢作川漁協のあの新見っていうのは憎たらしいやつだけれども、このデータを見ると公平に出てるじゃないかと、これで話し合うなら話し合えるぞというようなことになりました。まあまあ私たちも農業用水団体の言葉を覚えて、発電会社の言葉も覚えて、あるいは官庁の用語も覚えて、それぞれ意思が通じるようになったというのが、一番の成果じゃないかなと思っております。先ほど基調講演の中で、「いなし」という言葉が出てきましたけれども、今はいなしたり、いななされたりして、仲良くやっております。研究所の関係のことでは、そういう成果があると思えます。

それから、漁協の現在の体質ですが、先ほども言ったように、案外面白い組合になりました。組織の中の分権体制がしっかりしてきました。大体委員長クラスは、私どもの組合の仕事をほとんどやるわけです。放流から河川愛護から、産卵場整備から、そういうことは各委員長クラスがみんなやって下さるわけです。そんなような体制で、ダムが半分が川底に入ってしまったようなところで、天然アユを孵化させることに成功をしたと思っております。また、偶発的な要素もあるんですが、多分天然アユは営業レベルでも復活したんじゃないかと思っております。矢作川漁協の一番面白いところは、たくさんダムがありまして、そこをアユがうまく上っていけない、たとえば、国交省が直営で管理している矢作ダムというところはそもそも魚道がないんですね、それで魚道を作ってくれとっておるといつできることやらわからんから、そんなことは待っちゃおれんので、そここのところはトラックで越えようじゃないかということで、各ダムを

水量が少ない時は全部トラックで越えて、上流の方へ運んでおります。秋になるとアユは海の方へ下って行って、海の近くまで行って卵を産むんですけども、それもトラックで上流で捕まえて運んできて、産卵場の方へ持っていきます。豊田市は自動車都市ですので、矢作川のアユは自動車で旅をします。トヨタ自動車の車ですが、上流へ行く時も、下流へ行く時もトラックにだいたいお世話になっております。匹数でいいますと、去年、天然アユが300万上ってきたんですけども、そのうち100万匹が自然溯上で、残り200万匹はトラックにお乗りになりました。

多様性の関連では、先ほど涌井先生がお話しになった、生物多様性をどう保全したり回復したりするかという問題では、私どもは今、回遊魚の復活を中心にして仕事をしておりますので、どうしてもダムにきちんと魚道を整備して、魚道の運用を中電のみなさんと相談をしながら、水量調整もして頂いて、ダムの運用も考えていきたいわけです。今後の問題として一番大きな問題は、なんせ一番新しいダムでも40年近く経っておりますので、老朽化してきております。老朽化してきておるっていうのは、ダムのコンクリートが劣化しているというような意味ではなくて、内部に非常にたくさんのヘドロを抱えていることがわかってまいりました。それをどうやって除去するか、そういう大きな問題があります。矢作川研究所が通訳してくれるようになって、話がうまく進んでおるとい話については、ごく最近のことですが、ちょっと後で補足をしたいところがありますので、お話をしたいと思います。

○コーディネーター ありがとうございます。続いて大沼さん、お願いします。

○大沼 木曾川水トラスの大沼です。私は木曾川の中流域の御嵩町へ通い始めて14年くらいになります。その理由というのをお話したいと思います。

木曾川流域の人口は百何十万なんですけれども、この水を利用して生きている人500万人です。まさに生命の川です。それから伊勢湾・三河湾にとっても、砂や栄養源を運び込む大事な川、生命の川です。この川の流域を眺めてみたいんですが、黄色で示した山、乗鞍、御嶽、木曾駒、白杵岳、これらは日本100名山なんです。100名山の山が4つもあるという流域です。流域の大きさが5,200 km²、矢作川の3倍位です。それから流路延長は、ちょうどやっぱり矢作川の2倍位ですよ。日本で8番目位の流路延長の大河川です。この上流にいくつかダムがあるわけですよ。ここに岩屋ダム、牧尾ダムといったようなダムがありますけれども、実際にここに貯まっている水は、ここから直接町へ行くわけではありません。取水口は下流に全部で3つあるんですけど、代表的なのは兼山取水口、これは愛知用水ですね。それから、これは犬山取水口、愛知県の名古屋市が取水をしています。この取水口の

ちょっと上流がこの御嵩町なんですけど、関電の丸山ダムのちょっと下流で事件が起きたわけですね、14年前に。

ここに東洋一とも言われた大型の産廃処分場ができるという話が持ち上がりしました。私は名古屋に住んで初めて、上流のことに気が付き始めるわけですね。これが今の丸山ダムです。ここは蘇水峡という昔の名所です。これが木曾川の本流なんですけど、そこに面した急な沢です。ここにダムをこさえて、産廃を100万トン入れようという構想でした。これは横から見たところですね。ここにダムができて、この尾根筋までの谷にごみを埋めようという計画だったわけですね。ここに集落があります。10件の家がありました。すでに買収が済んでいました。そういう状況で何とかしなくっちゃということで、運動が始まりました。この産廃なんですけど、この新聞記事を見たら分かりますけども、満載したトラックが北へ西へ、やばい廃棄物ほど遠くへ行けるんですね。高速道路に乗って、つまり1トン3千円の安い産廃は、近くにしか行きませんよね。だけど1トン10万円の危険な廃棄物は日本中どこへでも行けますよね。そういう意味で、高速道路に乗って旅をするんですね。さっきトラックで移動するという魚の話もありましたけど。この東海3県だけ見ても、不公平は明白ですよ。愛知県は工業出荷額日本一を30年続けています。産業廃棄物がじゃんじゃん出ます。それを自分のところで処理するんじゃなくて、隣の県へ流れてるとするのは、帯グラフの太さでわかりますよね。しかも、法人事業税含めて税金は下流にしか行かないという構造ですから、三重と岐阜は明らかに割り勘負けしてますよね。その岐阜県に、産廃処分場の計画ができたということなんです。業者は本当にお金まかせ。毎年2億円という数字が出てますけども、合計で30億円を町に寄付するっていう話でした。

御嵩町の年間予算は55億円くらいですから、そこへ30億円というのは、目も眩むようなお金です。当事の町長だった柳川さんが処分場に異議ありと声を上げた途端に、頭をかち割られて死にそうになったっていう事件が起きました。そのショックもあって、御嵩町で日本で初めて産廃処分場をめぐる住民投票が行われました。投票率は高く、ほぼ90%で、投票した人の8割が反対でした。9×8=72ということで、全有権者の70%が産廃処分場を拒否するという回答をしてですね。処分場計画はとりあえず止まっています。しかし、業者が土地を持っているという状態で、この御嵩の人達は宙ぶらりんで今十何年きっているっていう状態です。産廃処分場は嫌だという思いで投票なさったわけですが、その動機の中には、下流に住んでる人達500万人の飲み水が危険だということがありました。これがやっぱり大きいキーワードになって、こういう判断につながったと言われています。ところがこの御嵩町の人達は、高い水道料金払ってるんですね。水道料金って、日本中自治体ごとにもものすごくまちまちなんです。この棒グラフを見たら分かりますけど、月に20トン位水を使うという標準家庭で、御嵩町は4,600円なんですよ。名古屋市は

どうですか。2,200円なんですよ。だから、2,000円以上違う。年にすると30,000円位の水道料金の差があります。しかも、御嵩町の人達は木曾川の水飲んでません。田舎の町はみんなそうなんです。都市用水があるようになったのはずっと後なので、ずいぶん高い水を買わされて、御嵩の人達は飛騨川の水を飲んでます。で、こんな高い水道料金を払ってるんですね。下流のことを心配してくれた御嵩の人が高い水道料金を払っている。だからここでも、上流の割り勘負け現象というのが見えてくるわけですね。

我々はこの話に出会って、びっくりするわけですね。御嵩の人が下流のことを考えてくれたのに、我々は安い木曾川の水しかも安全で美味しい水をがばがば飲んでるという事実には直面するわけです。かつて、川というのはつながっていたわけですね。筏流しでつながっていたし、塩の道っていうのが上に上っていきましたよね。この道がみんなダムで寸断されていくという歴史がありますね。安全で美味しい水を飲めてるのは誰のおかげかって、誰も考えないんです。高度経済成長以後、上流域はものすごく困ってるという状況があったけど、下流の人はまったく気が付かない。そのままざしを我々は発見しました。残念ながら名古屋市民共通のまなざしにはなっていないんですけど。

上流の困窮ってなんなのか。僕は下流が原因になってると思うんですね。たとえば過疎。限界集落って言葉が今、出ますよね。それから高齢化。これって若者が全部下流の町へ吸われたからですよ。現金収入を求めて、要するに下流の繁栄、工業立国の日本国が繁栄したっていうのは、上流から若者を奪ったってことですよ。それから農林業不振。まさに日本の工業製品を外国に自由に輸出するための自由貿易体制、その見返りに安い農林産物を輸入するっていうことで、上流の農林産業が疲弊するっていうことですよ。その足元を見るように、疲弊した上流、年寄りしかいない地域に、産廃業者がお金を積んでやってくる。それで買収を受ける。そして産業廃棄物が下流の企業から出て、上流へ上がっていくという割り勘負け構造が出て来るわけですね。

下流から上流に助っ人するのに何があるかって、我々は考えました。いろんな勉強しました。いろんな制度もあります。その中で、水源基金の問題を考えてみたいと思います。まさにこの矢作川水系から、さっきご紹介があったように、この水源基金が始まったんですね。しかも明治用水の歴史をちょっと読ませて頂くと、都築弥厚という人が幕末に用水構想を立てた時から、「上流に感謝する」という思想が矢作川にはあったみたいですね。こういうのが、他の川にはずっとなかったということです。我々の運動が始まってから、東郷町の町会議員の人が提案をすることによって、中部水道企業団、日進市とか三好町とか、この辺の町が集まって作っている水道組合ですが、そこが1トン1円の水源基金を始めました。それから横浜や神奈川でも矢作川に見習って、水源基金を始めました。ほとんど1トン1円なんですけど、平成16年から積

み立てが始まってるという、これは我々の運動の成果でもあるんですね。東郷町の議員さんが提案したのは、こういう我々の気づきの延長線で、波動がそこへ行ったということです。

この水源基金なんですけど、今どうですかね、正確な数字はわかりませんが、矢作川の豊田市がやっている水源基金というのは、年間3千万円位だったんじゃないでしょうか。それに対して、名古屋市の水道使用量って1日100万トンなんです。今大分下がって90万トン位になってますけど、1トン1円で計算すると、3億5千万ですから、1桁多いですね。しかも、1トン1円ってケチな値段だと思いませんか？ さっきの水道料金の話を考えれば、明らかに御嶽の人は倍の値段を払っているわけですから、それを思えば1トン100円の水道料金に対して1%ですよ。それが10円だったら35億円。これは本当に上流が元気になるお金だと思うんですね。こういうのができないのかな、と。御嵩町民になったつもりだったら、1トン100円出していいってことなんです。その10分の1くらいは出せるだろう。これをなんとか、実際の制度として確立したいなというふうに思っています。こういう話をしていたら、あるシンポジウムで、名古屋市の副市長さんがこういう話をしてくれたんですね。「木曾川上流は、昔尾張藩がすごく過酷な支配をしていたけれど、その見返りに木曾の上流に毎年、1万俵の米を送っていた」っていうんですね。これ、1キロ300円で計算してみると、1トン0.5円位の、50銭位の水源基金に相当する位のお金を江戸時代でさえも送っていたということですね。我々にできないことはないってことです。

さて、我々なんですけど、そういう制度を実現しようという我々の力量が足りなくて、なかなかうまくいってません。たとえば、新しい河村市長さんにそういう提案をしました。なかなかうまくいってないんですけど、我々ができることっていうことでお金を集めました。名古屋市民から。残念ながら600万位しか集まらなかったです。御嵩町に、役場で使って欲しいというふうに持って行ったお金を、柳川さんがですね「じゃあわが町の森を買ってくれ」と、そこで上流と下流の人が交流する場を作ったらどうかと言われて、12年前に600万円のお金でこの森を買いました。矢作川の上流と同じように、荒れ果てたヒノキの人工林がたくさんあります。その間伐を始めました。3年前からは、御嵩町の町有林、これが800町歩もあるんですね、そのうち3町歩を引き受けて、間伐を始めました。民有林と町有林と、土曜日と日曜日と分けながら仕事をしています。3町歩はもう終わりました。だいたい我々の力量だと月一で、年に10日間で、1町歩くらい間伐ができます。これは、我々が間伐したほほでき上がりに近い状態の町有林の間伐後の絵ですね。それから枝打ちもやっています。8mの梯子に登ってですね、10mまで、4mの材を2つ採れる位になるといいなと、それからこれは間伐がすんだところで下生えが出てきたところですね。そうすると、

ササユリが咲いたりするんですね、光が入ってくると。

それから、最近ボランティアブームですから、インターネットで色々な広告を出すと、こういう若い人たちが来てくれたりするようになって、大分賑やかになりました。ただね、こういうボランティアの若い人がじゃんじゃん来ると仕事が進まない。実務上はなかなか難しいものがあるんですね。たくさん若い人が来てくれるのは嬉しいんだけど、安全に木を切るってとても大変で、とたんに仕事が進まなくなります。こうやって木に引っ掛かった時どうするんだよ、みたいな講習会とかもやっております。我々の森がここにあってですね、それから町有林がここです。これ上を流れているのは木曾川ですが、この処分場予定地に近いところで我々は今仕事をしています。

最後の話です。いよいよCOP10が今年10月に開かれます。COP10というと、生物多様性、生き物の賑わいというふうになりますけど、同時にですね、ブラジルのクリチバで、COP8の会議が開かれたときに、その宣言の中に生物多様性に対する都市の責任というのが盛り込まれたんですね。何かっていうと、都市って、生物多様性ほとんどないわけじゃないですか。さっきの多摩川の話もありましたから、探してみるとあつたりするわけですけども、まあ貧しいですよ、都市は。だから、上流それから下流の伊勢湾・三河湾の生物多様性に依拠した飲み水、それからいろんな林産物、農作物、そういったものを食うだけですよ、お金は払ってるかもしれないけど。そうではなくて、このクリチバの宣言に則るものならば、木曾川の上流域の生態系サービスを受けている我々名古屋市民は、上流域の生物多様性の保全に責任がある。たとえば、1トン10円の水源基金を作る、みたいなことで、上流域支援の制度を作りたい。我々のボランティア仕事は、本当に焼け石に水です。ただ、人々に上流を見るまなごしを与えることは非常に有効な方法だと思いますが、同時にそれは焼け石に水で、ボランティアの活動で里山とか人工林は、まったく回復しません、日本中のことを考えたら、だけど、その制度を作るときの足場にはなるだろうと思っています。何とかですね、今年、風が吹いているうちに、こういう制度を名古屋市にも作りたいなと思っています。

最後に自然との付き合い方ですが、この説明は後で機会があったらしたいと思いますが、僕は不可知を知る、つまり、科学技術で知ることができない部分というのはたくさんあり、しかも多分永遠に分からないことがたくさんある、そう思って自然とつきあいたい。つまり科学技術のいわば発展に目を奪われて、何でも分かるような気がしてるけど、そうではないと言いたい。以上です。

○コーディネーター ありがとうございます。続いて浅香さんに、活動のご紹介をして頂きたいと思います。

○浅香 三河淡水生物ネットワークの浅香と言います。今か

ら簡単な自己紹介と活動内容を発表します。まず自己紹介ですが、僕が主にフィールドにしているのは、矢作川の隣の豊川というところ。これは流路が77 kmで、流域面積が724 km²の川で、主に淡水魚の調査をしています。淡水魚全体の魚類相の中でも、清水で生活するホトケドジョウとか、谷川で生活するナガレホトケドジョウの、主に生態の調査をやっています。そのほか、全然関係ないんですけども、琵琶湖の調査もやっています。こういったいろいろな活動はしてますけれど、今の僕の活動は、大体3本立てで行なっています。東三河地方の豊川を調べていると、どうしてもお隣の川、矢作川にも関係がどうもありそうだ、もちろんこちらの静岡県側にも関係がありそうだということで、ちよくちよく両隣の河川にはお邪魔をしています。

まず愛知県の淡水魚に関する問題点について、ちょっとしゃべらせてもらいます。まず一つは、愛知県には大きな博物館がないということです。小さなところ、たとえば豊橋の博物館ですとか矢作川研究所、あとは碧南の水族館なんかはあるんですけども、大きな施設がないということがまず挙げられます。もう一つは研究者不足。これも博物館がないので研究者がいなくてということなんですけども、それに伴って情報が少ない。聞きにいても「分かりません」とよく言われます。情報がないというのは、情報の交換が全然なくて、聞きにいても分からないし、他の人に聞いてみて下さいと言っても、他の人がいないということです。最後なんですけど、県版の淡水魚のレッドデータブックが非常に内容が薄くて、よく僕の方に県の内外を問わず、もうちょっと淡水魚のことを頑張れという苦情がしばしばきます。僕が見ても確かに他の昆虫や貝なんかと比べると、内容がものすごく薄くなっています。

こういう経緯がありまして、ちょっと僕らの会を作ろうじゃないかということで、三河淡水生物ネットワークが立ち上がりました。まず1番の目的は、先ほど言ったように情報が全然無いので、情報の交換ができるようにしたいということです。そして、ただ情報を交換するだけじゃなくて、情報を表に出していこう、隠れているものを表に出していこうということです。あと、隠れている研究者の発掘と育成ということで、先ほどから研究者という言葉を使ってますけども、これはプロ、アマチュア関係なしです。自分で好きでやっている方で、川に入っている方も研究者とみなして、どんどんやっていこうということです。あと、研究者との交流です。愛知県には研究者がほとんどいません。他県へ行ったりとか、先ほど言ったように隠れている人を探して交流していこうという目的で活動してきました。

実は、三河淡水生物ネットワークは2008年の2月から活動を始めて、まだ1年経っていません。始まったのは4人からです。今13名で、今日、前に発表された阿部さんもその一員になっています。まだ色々なことをやりながら活動を行っています。活動内容としては、年3回、大体2月、6月、11月に情

報交換会をします。隠れている情報、たとえば僕が主に豊川の研究をしていますけども、ひょっこり矢作川に行くと、捕まえたものごととかしゃべると、それは大発見だということもあります。そんなことで、情報交換会をやっています。あと調査とか観察会などでの交流ということで、ボランティアであちこちいろんなところへ参加をしています。博物館などへの情報提供も現在やっている段階で、標本が欲しいと言ったらあげるとか、特別展の準備で写真を提供なんかもしています。合同調査ということで、フナとかアメリカナマズ、カニの調査をしています。このフナとアメリカナマズは全然獲れなくてこけてます。でもカニがちょうどうまいこといきまして、矢作川と豊川でおおよそ20種類以上捕まっています。みなさん、フナと聞くと何種類いるか分かりますかね。今現在、豊川では大体4種類くらい。雑種はいません。矢作川は5種類くらい。ただ、フナ、フナと言ってるんですけども、実はその中に5種類くらいいて、どの種類がいるか非常に分かりづらいため、ちゃんと正確に分類していこうということで、ちょっとやっています。これで活動内容の発表は終わりです。自然との付き合い方ということなんですけども、生き物の生活の場所に遊びに行くということで、普通だと、おれの川ということをよく言うんですけども、逆です。魚のいるところに、僕らがお邪魔するという感覚で付き合い方というのが、僕の考えです。以上です。

○コーディネーター ありがとうございます。それでは自己紹介の最後ということで、伊勢・三河湾流域ネットワークの丹羽さん、お願いします。

○丹羽 伊勢・三河湾流域ネットワークの丹羽と申します。ここにいくつか所属している母体があります。「矢作川 森の健康診断実行委員会」「矢森協」、これは先ほど紹介のあった森の健康診断を始めて、活動しているところです。「夕立山森林塾」、これはあとでお話しますが、ここで今「木の駅プロジェクト」という流域内フェアトレードのモデルを作っています。3つ目、その下の「山里文化研究所聞き書き塾」っていうのは、生き物の環境との付き合い方というものを、私たちは元手に手をつけずにその利子で生きていくというのが日本の暮らしの原型にあるので、そこを学んでいかない限り前には進めないだろうということで活動しています。こういうのをすべてつないでいくのが伊勢・三河湾流域ネットワークです。伊勢・三河湾流域ネットワークというのは、これまで山川里海、それぞれの業界ごとにオタクが集まって、「山は山屋」「川は川屋」「海は海屋」という形で喧々諤々空中戦をやっていたけれど、そんなことをやっても何ものならんじゃないか、山と川と海と里の違いを乗り越えて、それと産官学民の壁を越えて、豊かな伊勢・三河湾流域を作ろうじゃないかということで、5年前に作られました。その活動をご紹介します。それは、こんなような模式図で表せ

ます。要するに、山川里海をつないで、その基本のところでも市民調査的なものやっています、それをセミナーで発表して、どこで何をやっているのかを知って、つながり合いたいねということです。

ここでは伊勢・三河湾流域ネットワークの活動の中で、私の関わる部分ばかりを書きました。順番にやります。これは「森の健康診断」、先ほど報告があったように5年間行っていて、あと5年間実施します。矢作川流域に約1300人もの人が集まり、320ポイントの人工林の健康診断をやってきました。という計画。それが今全国の約20都道府県に、5年間で広がってきました。この地域でも豊川、木曾川、長良川の数箇所、鈴鹿川、あるいは熊野の方など、たくさん場所でやっています。それから「海の健康診断」、これは伊勢・三河湾、藤前干潟、六条干潟等で、同じように楽しくて少しためになる市民参加型の調査をやっています。それから「聞き書き」、これはチラシも入っているかと思いますが、篠島の聞き書き記録集が一番最近できました。矢作川の最源流の上矢作・奥矢作の聞き書きもちょうど去年致しました。棚田のある恵那の方でも行っています。聞き書きを通して、自然との付き合い方を学んでいくという活動もやっています。これは「山里文化研究所」、こういう基礎の上に立って、今「木の駅プロジェクト」というのをやっています。流域内でフェアトレードしていく、その一番小さなモデルを、恵那市中野方という集落で作っています。C材、放置されて使われない材をこういう軽トラで地域の山主たちが持ってきて、それを地域の店舗でしか使えないモリ券というに交換する社会実験を始めました。このようなことについて、1個1個少しお知らせします。

まず「伊勢・三河湾流域ネットワーク」で5年間を通してたどりついたことです。管内にはいくつもの環境団体、自然保護団体があるんだけど、私はそういうのは炭鉱のカナリアたちだろうと思っています。今の地球が危ない、地域が危ないということを、いろんなレベルで気が付いて何とかなくちゃいけないという形で動いていっています。先ほどの御嶽トラストもそうです。私たちもそうです。そうした団体が、どれだけこの流域であるのかというのは、誰も知らないということはありません。県や国のホームページにはコピーアンドペーストを繰り返した一覧はあるけれども、でもその中身は信用できない。いいことばかり書いてあるけど、本当のことは分からない。じゃあどうしようかということで、私たちはその光と影、どの団体もこういったプレゼンの時にはいいことしか言わないんだけど、こんなつらい思いをして、こんな課題を持っているんだと、すなわち自慢と葛藤を対人調査で、きちんと生身の人間が自分の名前を記して聞いて来て、そういうことでつながっていくよってということで、流域再生調査ということを始めました。この成果は環境省のホームページにあります。今、3期目に入ろうとしています。今、近藤朗さんを中心にやっています。環境保全団体の調査

をやっている中で、課題が出てきました。第1期は生業とのからみ、海の関係なら、漁協とどうつながっていくのか、山なら森林組合とどうつながっていくのか、あるいは漁業者や林業家たち、あるいは農業の人達とどうつながっていくのかというのが課題になりました。第2期には限界集落とか、漁村とか、そういう生業のところに行っているような問題があるってということにやっとみんなが気づき始めてきて、動き始めてきた。それもまた注目してください。

次は「森の健康診断」。これは飛ばしますかね。市民と一緒にになって研究者と市民と行政が対等、平等の立場で動いていく。調査結果をすべて公表していく形で地域を変えていこう、流域を変えていきたいということで、これだけの地域でやってきました。その中で、ここがすごく今日のテーマにも関係すると思いますが、森の健康診断の実行委員会は、協働とはなにか、研究者と行政マンと市民がどのような形で対等、平等に協働して地域を変えていけるのかということ考えて議論しあうトレーニングの場になりました。この活動では行政区の境界も私たちはひょいひょい飛び越えていきます。そこで、この町はあんまり職員はよくないとか、そういう行政の健康診断も結局してっちゃう。行政もその中で鍛えられていくということをやってきました。

続いて、先ほどお話がありましたように、森林ボランティアに何ができるかということ、本当に何もできない。きっかけ作りしかできないだろうと、私たちも思っています。その中で、僕らは本当に矢森協という組織を通して、ほとんど素人である山主さんたちをどう変えていくか、山仕事の楽しさや意義を伝えようとしてきて、それなりにやれてきた。けれどももう一つ足りないということで、「木の駅プロジェクト」というのを始めました。これは、山の木は出したらお金になるんだよという体制を作る試みです。大体どうでもいいような曲がり材とかそういう材は、チップになる時は、トン3,000円です。それにプラス、私たちのファンドで3,000円足して6,000円出せば、みな出すようになるんです。このような流れです。私たちが支援をして、志のある地域のおじさんたちがその気になっちゃって、材を搬出する。軽トラとチェーンソーは山では誰でも持っていますが、チェーンソーはあまり稼働していません。軽トラに載せるには、1.8mくらいまでの材でなきゃならない。けれど用材というのは3m、4mなきゃ出せない。だから、普通の山主さんたちは出せない、そしてよけい山に興味がなくなっていく。そこで、軽トラに乗る材を集めようという実験です。

材の3,000円/tにプラスして6,000円/tにすると、人を使っただけの作業は成り立たないけど、自分の小遣いにはなるという金額なんです。「C材で晩酌を」というキャッチフレーズがあります。その金を中野方という地域、ここには日本棚田100選の棚田があるんですけども、その十数軒しかない商店でしか使えないモリ券という形で渡す。その金は全部小流域の中で動いていく。だから山の、今まで木なんか出したこ

とないおじさんたちが、私たちが交渉すると、軽トラにちょいちょい材を載せて出すようになる。それを交換して、地域の散髪屋さんとか飲み屋さんで使って、地域が元気になっていく。若い者もおじさんもちょっと休みにやるかという形で、地域がの人が行っている。その木材は基本的に今はチップ工場に行くけれど、もう一つ、バイオマスとして回っていけば、流域のエネルギー需給にまでつながっていく。今日、僕のテーマは流域内フェアトレードだと思います。それを動かしていかなければならない。先ほど涌井先生の話に感動したんですが、涌井先生は私たちの代弁をしてくれてるんだという本当に思いました。じゃあ、そういう知恵はどこにあるのかということで、次にいきます。

そういう知恵は、聞き書きで得ています。私たちは結局、そういう知恵は日本にあったんじゃないか、昭和30年代の高度経済成長前に我々は持っていたんだと考えました。何でかと言うと、こういう逸話があります。2000年のエクアドル地震の時に、その支援と持続可能な都市のあり方をめぐって、世界中の環境保全団体と研究者が集まった。その時に、この地球は50年後はどうかという議論がなされた。3日間議論をし続けた挙句の答えは、「絶望」の2文字でした。欲望をコントロールできない人間は絶対このまま滅びる。絶滅危惧種は我々なんだということで、その会場が真っ暗になった。その時に、ピーター・バーグというアメリカのネイティブ・インディアンの末裔の方が、壇上に立ってこう言った。「そうじゃない。希望はある。それは、日本の農山村だ。トヨタとか名古屋とか大阪ではなくて、日本の農山村へ行こう」。「日本の鎮守の森を中心とした持続可能な暮らしの知恵に学ぼう。足るを知る掬をそれぞれ持って、自身の範囲内で暮らしを1000年も続けている日本の山里へ行こう」と、演説したとたんに、スタンディング・オベーション。会場に光が射したと言われています。その基本は、ここにある。これからCOP10、今年外国から、ピーター・バーグの話聞いて日本に来る人たちに、我々が何を見せるのか、我々は農村部、山里へ連れて行こう、海へつれて行こう。その時だれが通訳をするのか、我々が通訳しなければならぬ。その時の聞き書きもできていくということで、澁澤寿一先生や塩野米松先生と一緒に、今、森の聞き書きをしています。聞き書きをする人を増やすことが、まさに山の、海の古老たちから聞く知恵を、バトンタッチしていける状況につながっていく。このような形で我々は、伊勢・三河湾の流域が、こういう調査がきっかけとなり、研究者やいろんな団体が混沌となりながら、大きく変えたい。先ほどまさに涌井先生が言われたように、こういうことをつなげていきたいということで、今、伊勢・三河湾流域ネットワークで、特に流域再生調査を中心に頑張っています。そんな中で今日のトークに参加していきたいと思えます。よろしくお願ひします。

○コーディネーター どうもありがとうございました。伊

勢・三河湾流域ネットワークの活動は、本当に今日のディスカッションのメインにもなるかというような視点だと思います。涌井先生の方から、今までのご紹介に対しまして、コメントを頂きますでしょうか。

○涌井 コメントを申し上げる立場というよりも、大変私は感動しましたし、やっぱり長靴を履いている方たちは違うなと、本当にそういう印象を持ったんです。どういうことかという事です。やっぱり、現地現物主義、これが非常に重要です。先ほど来、お話があったようにですね、研究者とか学者というのは、論文を書くことに勢力をあげて、本当にそれを社会化するというところにはなかなか力が動いていかない。そういう中で、こうした共通のテーブルができるということは、非常に意味のあることだと、とりわけですね。今、私はずっと話を伺って、大変な知恵を感じました。たとえばモリ券。フェアトレードをどういふふうを実現するのか。インドのビハール州では大変貧しい人達が自分たちで銀行を作っていて、その代表はノーベル賞を受賞したわけですけども、そういうシステムがあるんですね。つまり我々は、今までの経済価値というものの概念をがらっと変えなきゃいけない。

今まで我々は、私は煙草吸いでこんなこと言う資格はないんですけども、自分がイライラしてくると煙草を吸って、それを吐き出す。つまり内部不経済を外部化してきたわけですね。ところが外部化した時には、実は受動喫煙している人がいます。そのことはあまり今まで考えてこなかった。ところが、これからの時代というのは、外部不経済をいかに内部化する。つまり自分たちが出したものをいかに責任を持って循環させていくのか。これが実はコストです。工業化社会というのは先に値段があるんですね。先に値段があって、そこからコストを考えていく。でももうそれでは通用しない。環境に対するコストも入れて、結果としてプライスを出していく。つまり価格が決まってくる。こんなようなメカニズムを作っていくとどうしようもない。

そこで上下流の話を敷衍して考えてみますとね、全くそこに尽きると思うんですね。先ほど私は非常にいい勉強をさせて頂きました。かつて、木曾あるいは奥飛騨の方を、実は徳川家康が自分の息子がかわいくて、尾張藩に繰り入れたという歴史があります。それに感謝して、名古屋の二の丸へ行く庭園があるんですが、あれが木曾川そっくりにできているんです。それはその感謝の印だということです。余計な話で、どうでもいいんだけど、それに対して1万俵の米を与えた。なるほど。まさにそうした考え方が、非常に重要だと思います。先ほどクリチバ宣言の話が出ました。これもですね、ぜひみなさんにも参画して頂きたいんですが、一昨年、エルフルトというドイツで初めてクリチバ宣言を受けた都市で生物多様性の会議が開かれたんですが、それを引き継いで、この5月に名古屋で、第2回の「都市と生物多様性URBIO」という会議があります。そこでの議論もどちらかと言えば、都

市の中の繁栄だけに偏ってはまずいんですね。

私、実はぶっちゃけていいますと、上海万博のプロデューサーに招聘されたんですね。そしてその時に、"Better City, Better Life"と言ってるわけですよ。ところが話を聞いていて段々腹が立ってきて「私は絶対引き受けません」と。かつて毛沢東は「農村が都市を包囲する」と言いました。しかし今、上海市が上海市だけの繁栄を考えたとしたならば、ぜんぜん話にならない。実はこれからの都市というのは、都市とルーラルの関係をいかに共有化するか。この観点がなかったら、better cityもbetter lifeもないんだ。だから私は、そういう発想がないんだったらお断りをするといい、断わってきました。それと全く同じことを、今我々自身にも問いかけなきゃならないところがある。今までは社会資本ということだけに、我々は目を奪われてきました。しかし、もう一つこれから考えていかなきゃいけないのは、実はその社会資本を支えている自然資本の価値というものを、現実の経済の中にどう折り込んでいくのか、ここが非常に重要なんですね。ただし、この自然資本の価値を社会資本の中に置き換えて、経済のシステムの中に置き換えていくということは、一つだけメリットがあるんです。それは何かというと、その気になった多くの人々がいれば、実はそのコストは半減するということです。

そうしたことを今日、皆さんの話の中から学びました。日本のキーワードというのは実はどこにあるかということ、「つなぎ」と「まわし」なんですよ。たとえば「まわし」という言葉で言えば、作りまわし、使いまわし、これは循環です。それからあとは、全部「つなぎ」を考えた。なぜかということ、海の漁師の方々は、実は一番山の神社を大事にしたんです。それは旌表せいひょうと言ってですね。山を大事にしなければ、魚種が非常に少なくなっちゃう。もう一つは、山の頂を見なければ、自分の漁場がどこであるかも分からない。房総の方に行くと面白い「祝舞」っていう大きな半纏はんちんがあるんです。大漁の時に着るんですね。そこに下にですね、いわしが波の上に飛んでるっていう絵があって、上にかぶらが書いてあるんですね。これは「浜大漁、丘万作」という題材なんです。つまり、浜が大漁になればいわしの肥料が丘に入るから丘が豊かになる。つまり、海彦山彦ではありませんけども、そうしたことを本当に叡智として我々の祖先は持っていた。

先ほど申し上げましたように「いなし」というのはですね、自然をよく知ればこそ、その自然の我々に対する外力を、どれだけ小さくするのか、そしてそのサービスを共有するのかという知恵が得られます。それが皆さんのお話の中にしっかり出てたんじゃないかなと、私は思います。本当にここの中で課題が絞られてきたのは何かと言えば、どのようにつなぎ合いの関係を作るのか、つまり共同のテーブルを作るのか。それからもう一つ、実際の経済の中で、自然が働かせてくれている生態系サービスというもののコストをどのように分担しあうのか。そしてもう一つは、先ほど私が最後に提案

したこれからの「共」、すなわち、公でもなければ私でもない、共というものをどのようにシステムの中にきちっと折り込んでいくのか、このへんが非常に重要なことだなと思いました。

組合長の話聞いて思いました。私は実は昭和49年に「とうきゅう環境浄化財団」という、一つの川に即した財団を作り上げて、それ以来ずっと川のことをやってきたんですけれども、その時から実は矢作川のことをずっと見聞きしてきました。そして今日は組合長が来るっていうから、相当恐ろしい人だろうなと思ったら、結構やさしい人なんですね。予想が違っちゃったんですけども、その頃私の耳に入ってきたのはですね、戦う漁協としての噂でした。こういう漁協がいなければきっと川は良くならないっていうふうに思っていた時代があるんですが、本当にそういう意味で、これからどういうふうに私たちがつながり合うかということ、今日大変貴重なご提案を頂いたというのが私の印象です。ありがとうございました。

○コーディネーター ありがとうございます。新見さんは戦う漁協のやさしい組合長さんでもあります。矢作新報というローカル新聞の社主でもあり、矢作川流域をずっと見てこられたという歴史をお持ちのことと思います。上流からもたらされる安心・安全な水であるとか、そういうものに対して、下流がいかに恩返しをしていく仕組みづくりをどうしたらいいかということも、一つの大きな課題です。そのためには、先ほど流域内フェアトレードという言葉がありましたけれども、流域内の経済循環ということも非常に大事になってくる。そうしたようなことも踏まえて、ご意見があったらお聞きしたいと思います。

○新見 ちょっと発想は違うんですけども、先ほど漁協を紹介する中で、よく内部の議論をしている漁協だと、「難しいぞこれは」という意味のことをご紹介申し上げましたけれども、私は自然環境が悪くなっていったから魚が減ってきたんだというだけの議論はあまり好きじゃなかった。特にアユなんか見ておりますと、これは産卵期に徹底的に獲っちゃうからアユが減ったっていうことがあるんですよ。だから、産卵期の保護くらいはちゃんとやれる漁業団体にならないと、これは駄目ですよという議論を、天然アユが復活の兆しが見えた時にやった。よその漁協に行ってそういう話をしたら、「あんたそんな話をしとって、漁協の組合長、よく成り立つね」ということだったから、「だけど、本当に復活させたいなら、やらざるを得んじゃないか」という話を言ったら、「うちの組合ではそんなことやったら、漁協の組合長、ついでにクビになっちゃう」ということだった。「そんなの、僕はなるならなつたでいい」と言いました。本当に魚を増やすことが大事なことから、自分の欲望を自己規制できないような組合は駄目だという話を、それ以来、漁協の内部でも話を進めてきました。大体、今日も漁協の組合員のみなさんた

くさん見えとるけども、僕は組合長として、絶対安定多数派になったことはない。1回もない。ちよくちよく議論が起きてるから、採決やれば負けるようなことはしょっちゅうあったんですけども、まあまあ、産卵期の保護をきちんとやらないかなという意見にみなさんなってきた。で、今の復活があると思うんですけども、そういう非常に大事なところにまで議論できるような漁業団体に、矢作川の場合はなったなあという感じを受けております。まもなくやめますので、非常に安気にものを言ってますけど、そういう大事なことだと思います。

それからもう一つ、ついでの話ですけども、漁業団体が研究機能を持っていないと、そういう話ではできないわけですね。私どもには矢作川研究所がある。水産試験場もある。しかし、漁協自体が研究機能を持っていないと、細かい話ではできないわけですね。それで、昨日決まったんですけども、漁協の役員選挙がまもなくある。その時に、天然アユ調査会という、半分研究団体が半分釣り団体、素人研究の、全部で60名くらいの大きな団体ですけども、そこから3人理事を出してくれということで、それも決まりました。研究所から出て来る職員の他に、矢作川のかかなり腕のいい釣り師が、矢作川天然アユ調査会の推薦で、3人出てまいります。普通の理事は漁協の内部で支部長をやったり、いろんなご苦労をなさって段々階段上り詰めて、かなり年くってから理事になるんですけども、今度の天然アユ調査会から3人出てくる研究担当の理事は、まだ40代くらいかなあ。若い、年くった人でも50代ぐらいです。そういう研究機能を漁協内部につけて、これまでの天然アユ復活の実績を上げていこうと、実績を守っていこうということです。以上です。

○コーディネーター ありがとうございます。やはり、調べるということを中心に、地域を動かしていくことが重要です。私も研究所に入りましてもうすぐ12年になるんですけども、新見さんはずっと事務局長として研究所の運営に携わられていた。その当初の頃とは、新見さんのお考えもずいぶん変わってきたなど、感慨深いものがあります。研究所のデータが説得力のあるものとして、他の立場の人達と交渉するための、一番必要なテーブルになるんだなということが、評価されるようになったと感じました。今日は全体のテーマとしては、どうやって生き物が豊かな流域圏づくりということを実現していくかということについて、アイデアを出し合うということです。今日のそれぞれのパネラーの皆さんが活躍されている、そうした中でぜひ情報交換し、知恵を出し合いたい、自分たちのところのないような見方を入れていきたいというようなことを、それぞれのパネラーの方々、そして会場の方々も考えて頂けると思います。大沼さんと浅香さんから、今日の基調講演とそれぞれのパネラーの方々のご発表について、感想やご意見があったら、ぜひお聞かせ頂きたいと思います。大沼さんから、お願いしてもよろしいで

しょうか。

○大沼 今の皆さんのお話を聞いてですね、しゃべりたいことがたくさんあって、どれをしゃべったらいいかちょっと困ってます。一つは、涌井さんの話に少し絡めますとですね、ドイツの山村にたくさん都市の人が来て、野菜を買ったり、食べたり、一生懸命してるっていうのを、あるルポライターが見て、その都市の観光客に、「なぜなんですか」って聞いたっていうんですね。「おいしいんですか？」って。「いやー、違う」って言うのね。「無農薬だからいいんですか？」って言うと、「いや、違う」って言うわけですよ。最終的な答えは何だと思いますか？「我々がこれを買ったり食べたりしないと、この村は消えるから来てるんだ」という話でした。だから、自分が得するとか、安全なものを食べられるからみたいな発想で、人は最初に動くわけですけども、そこまでいくようになると、上流と下流の問題ってずいぶん状況が良くなると思いますね。

ヨーロッパではすでに、もうずいぶん前からデカップリング制度というのを始めてますよね。このデカップリングっていうのは、カップルしないっていう意味ですね。カップルしないっていうのは、労働に対する対価としての賃金がカップルしてるかどうかという問題なんですね。デカップリングっていうのは、明らかに中山間地帯で仕事すると、農業やっても何やってもですね。実入りが悪い。だから、みんな町へ行っちゃう。だったら町へ行ったのと同じ位の所得を保証すれば、みんな山に残るだろうと。そういう政策を実際やってるんです。日本ではこれはなかなかできない。名前だけはありますけども、ばら撒きみたいな話になって、終わってるっていう状況ですね。つまり上流を守ることが、自分たちにとって、ないしはこの狭い地球で、上流と下流が割り勘負けせずに、うまいことやれる方法なんだということを、彼らは気が付いていると思うんですね。そこにどうやって気付くか。それはたとえば、我々がやっているボランティア活動だったり、上流に行って実際に木を伐ってもらう中で勉強をしてもらって、そういう人達が少しずつ増えていくみたいなことが大事だというふうに思ってやってるんですね。

もう一つですね、今の新見組合長からデータというお話がありましたけど、少し違う軸でちょっとお話をします。というのは、私の自己紹介の最後に「不可知。知ることができないことがあることを知る」というキーワードを出しましたけども、データって非常に大事ですよ。たとえば、矢作川研究所が過去に出されたデータに、アユの溯上数、子どものアユが春上ってきますけども、その稚アユの溯上数のデータを見て、僕びっくりしたんですね。ダム1個過ぎるごとに、2桁ずつ下がっていくんですね。だからトラックで運んでいるわけですよ。そういう意味では、魚道の構造がいいとか悪いとか言う以前に、ダムそのものがあると、いかにいい魚道があっても、もう2桁ずつ落ちていく。ダム2個過ぎたら4桁

落ちるんですね。そういう現実があるということですね。それから長良川河口堰の問題で今議論になっているのは、上る魚の問題じゃなくて仔魚、つまり孵化したばかりの子どもが下れないということで、はるかにアユを殺してるんじゃないかっていうことです。こういうことがやっと分かってきました。こういうことはずいぶん前から研究者は知ってたのに、みんなの共通理解になってないですよね。そういうことが分かってきたのも大事だけど、やっぱり永遠に分からないこともたくさんあるというのも、もう一つ大事なことなんですね。

この間、アキアカネが減っているという議論が、ある集まりの中であったんですね。冬水たんぼをやるとアキアカネが減るという話です。冬水たんぼは生き物に優しいとって今ブームになってるんですが、逆に明らかに減る生き物がいる。それはアキアカネの産卵様式と、冬水たんぼが合っていないからなんだという議論があってですね、そういう議論の中で、僕は昔、ニカメイチュウ、サンカメイチュウっていう稲の害虫が今激減して、珍しい虫になってしまったっていう話を別の昆虫学者に聞いたんですね。その話を集まりの中に放り込んだらですね、こういう話が出てきました。そのメイガというんですが、ニカメイチュウ、サンカメイチュウがいなくなったのは、稲作カレンダーが変わったからなんですね。稲を作るパターンが変わったからです。で、その話を投げたらですね、この矢作川研究所の間野さんという昆虫学者から、答えがありました。田んぼの虫には益虫と害虫と、普通の虫がいる。普通の虫が圧倒的多数派なんですけど、その普通の虫の生活史、どうやって子どもが生まれて、どうやって大人になって、どうやって卵を産むかということが、ほとんど分かってないやつが多いっていう話が出てきました。莫大な昆虫の中で、分かっているのは害虫と益虫だけです。普通の虫は全く分かってない。

それから今地球上に2,000万種いるという生物の中で、名前がついているのは600万種だと言われてます。この2,000万っていうのも怪しい数字ですけどね。ある論文を読むと3,000万って書いてあったりするわけなんですけども、とにかく、半分以上は分かってないわけですよね。わかってないままで、そういう生物がどんどん絶滅しているという状況がありますよね。これはもう、生態学者がいくら頑張っても、100年掛けても、何百億円かけても、多分わからないんですね。だから我々の、何でもわかった気であるこの地球ないしは宇宙全体の自然現象の中で、永遠に知れないことがたくさんある、このことを知りながら、やっぱり自然と対していきたい。それがデータに対する話です。

○浅香 皆さんの話を聞いて、僕の感想なんですけども、1つのキーワードとして「つながり」という言葉が非常に印象的でした。これは別にデータだけの問題ではなくて、データとか上下流のつながり、あともう1つは、年寄りの文化という話がありましたけども、年寄りと僕らみたいな中堅と、あ

ともっと若い子どもたちのつながりというものが非常に大事であるかなと思います。実は僕15年ほど前に、同じように魚のことなんですけども、70代から80代の人達に魚の地方名をいろいろ聞きました。現在、実はもう1回聞きたいなということがあって伺いに行くと、実はもう亡くなっていたりして、とても残念なことで、正直年配の方が亡くなると大きな図書館が1つ無くなったかなという感想があります。その他に地域のつながり、さっきは上下流でしたけども、豊川だったら隣の矢作川とのつながりということがとても重要なかなということで、すべての面で、生態系においても、全部1つのキーワードで、「つながり」が大事ではないかなということです。以上です。

○コーディネーター どうもありがとうございました。つながりという点で、生き物の豊かさを増やせるような流域の知恵というものを深めて分かち合っていく、立場を超える、空間を超える、世代を超えるつながりというものを、どう維持していくかという課題があると思います。丹羽さんの方からは、そのヒントになる話がとてもたくさん出ていたと思います。今回のシンポジウムでは本当にたくさんのキーワードが出てきて、とてももう私の力ではさばき切れないんですけども、共通の方から気付き合い、深め合いというキーワードが出てきました。ボランティアの活動というのは、気付きというものをもたらすのには有用だけれども、やはり実際に流域を良くしていくためには、仕組みづくりということがどうしても必要になっていく。こういったようなことも、課題になっているかと思います。こうしたことに関して、ちょっとご意見があれば、お聞かせ頂ければと思います。

○丹羽 まず、ちょっと固い話になってきたので、先ほどしばかりはゴルフの芝刈りじゃない、山の柴刈りだという話が涌井先生から出ました。その柴刈りというのは、皆さん薪の柴刈りだと思っています。それは違います。これは実は6月に芽を吹いた木を、そこで全部切って、山から転がして押し切りで15 cm位に切って、田んぼの肥料に埋め込むんです。こういう循環が里山にはありました。その奥が伐った木をマキとして使う山です。インターネットで「しばかり」と書いても、あれはゴルフの芝刈りじゃないんだよというところまでは分かるんだけど、そういう柴刈りだということまでは、ほとんど書いてない。伝わってないっていうことが、分かってるんです。聞き書きするなら、僕は昭和1桁以上でないと、残りはスカスカだと思うんです。その絶滅危惧種の話も、今しっかり聞いておかなきゃならない。山里海の人達は本当に都会の人達の図書館ですね。そういうことをしっかりつなげていくには、山村に住む人達の暮らしが成り立たなければなんともならない。その持続可能な暮らしをどうしていくのかということも、同時に議論しなきゃいけない。

山をきれいにして、重機を使ってガンガン木を伐ればきれ

いになる、水源涵養林としていけるという話がある。けれど、山里の人は暮らしていけなくなるとって、人のいない山ばかりがなんぼあっても駄目なんだと。柳田國男は、「都市が病んだ時は、山村に救いを求めよ」と、おっしゃったそうですけど、まさに今がそういう時なんです。山に施しをしてやるんじゃなくて、我々は山里に救いを求めている時だと思えます。先ほど大沼さんから0.5円、江戸時代でも下流から上流にやっていたんだ、豊田は今1円やって、やっと環境税の関係で少し変わってくる、たとえば10円でもいい、100円でもいいとおっしゃった。じゃあ、そのお金をどこに使うかということです。豊田市の水源基金が1トン1円。日本に先駆けっていて、その後ずっといろんな所がやっていって、環境税につながっていったんだけど、それを何に使うかということなんです。僕は、先ほどのC材で晩酌を、我々の木の駅プロジェクトのようなプラス3,000円の所に使って欲しいと思っています。それが地域の人達の儲けにはならないけど、セーフティネットになっている。土佐では、そういう仕事をクビになった人達が、それをしゃかりきにやったら10万やそこらになって、なんとか暮らしていけるようになった。その出した木が、地域のエネルギーや下流域のエネルギーになっていく。

よくよく考えていくと、日本ではコンクリートや鉄や油、それを中心に都市が成り立っているんだけれども、50年よりは前は全部木で、燃料も木でした。先ほどの写真を見ても都会の構造は全部木で賄われてきた。その木を作ってきたのは、山の人達です。その暮らしを、どうセーフティネットを作りながら支えていくかということになった時に、10円でもいい、100円、僕は100円取ればいいと思います、その金をああいう所で使うべきだと思う。その金をまた、パチンコ屋へ持って行って、それがどっかに行っちゃうんじゃなくて、流域内で回るようにする。だから僕らのモリ券は、大手スーパーやパチンコ屋では使えない、NPOだから、わがままに選べる。それも地域の人達もありがたいと言ってくれる。木の駅の場合は、隣の村がすぐ一緒に、今度は仲間に入れてくれとかいう形になっていく。モリ券はそういうものです。だから次は、アユ券を作ればいいじゃないかと、矢作川漁協が環境漁協宣言を出すだけじゃなくて、入漁券のうちの10円を、我々にじゃなくて、この流域でそんな形で使うことにやったらどうか。

今、木の駅プロジェクトを来年は豊田でやろうという動きになっています。あちこちで動くだろうと思っています。そういう所に、あるいは潮干狩りの5円を使って、山村に人が動いていく。内山節は、「あと50年経てば、山里の人達の3分の1が、都会人に占められていくということになればいいし、そうなるトレンドにある」と仰っています。そういうつながりを、我々はネットワークをきちんと、それも体温の感じるネットワークの中でやっていく。その仕組みづくりは、非常に単純明快なもので、案外できるということが、私たち、社会実験をやってみて分かった。森の健康診断もそうです。伐

ればいいってもんじゃない。どの位伐るといいのかということと、伐る人がちょっとした暮らしの足しになるシステムを作っていく。それでつぶれそうな商店も続いていく。そういうシステムづくりとつながり、我々のやってることで、自分もこづかいが得られ、晩酌もできるけど、地域の経済、さらに地球環境保全、CO₂削減にまでつながる。ちょっと楽しくて、少したためになるというレベルの仕組み、森の健康診断、あるいはこの木の駅、あるいはこの流域丸ごとの中でアユを釣ることが、地域の役に立つことだというシステムづくりを、今日は提言したいということです。

○コーディネーター ありがとうございます。都市と農山村の交流ということで、過疎化が進み、疲弊する農山村に、都市住民、下流の住民が入っていくという動きが、今豊田でも始まっています。都市農山村交流ネットワークも立ち上がりました。全国的に今、都市の論理、都市の考え方で物事を進めるのではなくて、農山村の昔からあった知恵、考え方というものが、これから生きていくのに必要なんじゃないかという認識が深まってきている。そういう枠組みの中で、上流域も含めた生き物の豊かさを守るという考え、そして都市側と農山村側のそれぞれの地域で、そうした仕組みを受け入れるということをしていかなきゃいけないと、皆さんのお話から、本当に今日は強く感じました。

今日は本当に濃厚な話をされるパネラーの皆さんに対して、非常に時間の枠が少なく、信じがたいことに、もうそろそろ終わりの時間が近づいてきてしまっています。それで、最後にパネラーの皆さんから、ひと言ずつ、今日のシンポジウムの中で思われたことについて、短めにコメントを頂ければと思います。

○新見 今写真が出ておりますけれども、これは伊勢湾・三河湾に注ぐ川全部です。まああの川だけで10本あるんだそうです。矢作川のアユの子どもが、前年の秋にほとんど下らなくても、あくる年の春に非常にたくさん上ることがあります。逆の場合もあります。矢作川研究所の魚の研究員の山本くんに、貴方たちのやっておられることは、まだ学問の数字になつたらんなーというような話をしたんだけど、ちょっとなんか違う理由もあるような気が最近はしております。たとえば、この10本の河川のうち、この宮川という川、かなり大きくて、矢作川研究所とも共同研究をやったことのある川なんですけれども、これが大洪水を起こすと、水はこっちに入ってくる。ゴミなんかもこの清掃にいったる矢作川流域の方があるんですけども、宮川の大洪水の時には、ここへゴミがいっぱい集まってくるということがあがるそうです。

宮川の流量は毎秒74.4トンですから、かなり大きな川ですね。矢作川の場合が38トンですから、矢作川よりかなり大きい。多分僕らの想像では、木曾三川のアユも三河湾に入ってきたらんじゃないか。宮川なんて、もちろん真ん前ですので

入ってきておる。矢作川が前の年に、あんまりアユは下らなくても上ってくることがあるというのは、多分そういうことじゃないのかなと思っております。木曾三川のアユをもらっておるし、宮川のアユももらってる。櫛田川のアユももらっとる。豊川のアユももちろんもらっておるということで、この10本の河川のアユというのは、遺伝子的には交流があるということは、もうはっきり結論が出ています。私たちは、伊勢・三河湾の単位でアユの保全をやっつけようかなというふうに思っております。以上です。

○大沼 丹羽さんから出た、水源基金でお金を集めて何に使うかっていう話のつながりです。日本のCO₂排出量ですが、京都で約束したのはマイナス6でしたよね。ところがプラス8になっちゃったから、合計14%減らさないといけないという話になっていましたよね。ところがこれ、リーマンショックで、この1年間で、日本のCO₂排出量は6.5%減ったんですね。ということはですね、14%減らす社会というのは、もっと厳しいってことですよ。町で訳の分からん仕事をして、現金収入で豊かに暮らすってというのはもう終わったと考えるべきだと思うんですね。でも考えようによっては、絶好のチャンスじゃないですか。あぶれだす若者たちに、山で働いてもらうようにすればいいわけですよ。その時に、環境コストとして水源基金等々で、支払われたお金を当てればいいわけですよ。そういう意味では、今世の中ころっとひっくり返す絶好のチャンスで、CO₂を本当に京都の約束どおり、90年時点のマイナス6%にしようと思えばいいわけですよ。もうちょっと景気よくならんかとか、成長しようみたいな話はないってことです。世の中、政権を取ろうとしたら、何かおいしい話を投げないといけないから、おいしそうなお話をしたがるけど、違うんじゃないですかね。そういうのが、地球環境と共存しながら、我々がサステイナブルに生きる道ですよ。口では言うけど、やっぱりもっとおいしい生活したいと思ってる価値観を根底からひっくり返して、田舎の暮らしのほうがいいというふうで考えるべきだということだと思うんですね。もちろん、山にはたくさん知恵がある。しばかりの話は面白かったんです。実は我々も同じことを知ったんですね。白河町の黒川というところで、田んぼと山というのはセットになって売り買いされたんですね。つまり、山の木というのは、実は田んぼの肥料なんだという話を我々も木曾川の上流で聞いています。以上です。

○浅香 簡単ですけども、自分たちの身の回りにあることをもう少し知ろうよということが僕の感想です。それは、僕が研究している魚だけじゃなくて、人の生活などにも同じように知らないことがいっぱいあるという気がしたので、もう少し自分の身の回りの大きな意味での生活というのを知っていかなくちゃいけないということです。

○丹羽 いろいろ話しましたがけれども、本当にまず第一歩は、本当のことを知りたかったら、身体ごと知りたかったら、まず大急ぎで「聞き書き塾」に入りなさい。聞き書き塾で、本当の話の聞き方、うなずき方とか、そこから学ぶ。学んで得られるのは、安心と権威です。それをまずしなさい。もっと簡単なのは、森の健康診断にまず出なさい。海の健康診断で、本当のことを知りなさい。頭でっかちなことはもういいからということです。それらも超えて、流域全体のことを知りたければ、伊勢・三河湾流域ネットワーク、近藤さんが中心になって動いている流域再生調査にぜひ簡単に参加してください。ただこれには掟があります。自分の分野以外のところにはしか行けないよって言っています。川屋は川に行っちゃ駄目、山に行けというようなことで、我々はメニューをいろいろ用意しております。もっと身体を動かしたけりゃ、御嶽も矢森協とか、森林学校に入ってください。まず本当のことを知りたければ、データとしてのことも含めて、きちんとそこに身を投じて、一緒にそこから流域のつながりができていく。人と人のネットワークがそこからできてきます。今日は涌井さんの話が聞けて、本当に意を強くしました。そのことを涌井さんのように上手く言えれば、僕ももうちょっとこれで食っていけるかなと。本当に今日は素敵なお話を逆に聞けて嬉しかったです。ありがとうございました。

○コーディネーター ありがとうございます。それでは最後に、涌井先生コメントをお願いします。

○涌井 私も、非常に今日は勉強になりました。ありがとうございました。この中でですね、2つの課題があると思うんですね。1つは、「山川草木悉皆仏性」ということを梅原猛さんが言い出したわけですけども、これは經典に基づいた言葉なんです。すべてのものに仏性がある。つまり、それは全部がつながっているんだよ、と。そのつながりを確認するシステムをどうやって作るのか、こないだ神戸国際対話というのをやりました。私は議長をやったんですね。ヨーロッパの人達は、やたら"cap and trade"そういう方向で議論を進めようとした。しかし私は、そこにこういうふうで議長声明を出しました。倫理と科学と経済は、等分の位置にあるべきである。これが非常に重要な認識だと思うんですね。日本人が実は何に優れてきたかという、倫理と科学と経済と一緒に考えることができるというのが日本人の知恵だ。すなわち、お作法、お行儀、そこから始まって、掟、そしてさらにそこから、その範囲の中で、たとえば、近江商人はですね。「売り手よし。買い手よし。世間よし」。コンプライアンスなんてことが言われる前から、そういうことをやってきた。そしてさらに自然と呼吸しあう。いなしあう。いなしを知るために自然を知る。そういう1つの知恵を磨いてきた。

これらの話がですね、皆さん方の、今いろいろ調査をされている話題の中から、1つ1つつぶさに、目に見えるように分

かってきた。そしてもっと大事なことは、体感ですね。我々は、実は原脳というところがあるんです。この脳球の下にですね。ここの野生の本能が、今萎縮し始めているんですよ。なぜかといえば、自然との応答が少ないから。知識として的大脑新皮質と、判断としての前頭葉だけが発達してる。そうすると、本当に野生の本能が人間としてどんどん小さくなっている。それで今、いろいろな犯罪が起きたりしています。そうした意味では、先ほどお二人が対談されたようにですね、本当に子どもの時から、自然というものは何なんだということ、皮膚感覚でつかんで、そこでもう一つ新しい社会の設計をすることが重要です。その設計のヒントがたくさん今日はあったと思います。本当にありがとうございました。

○コーディネーター どうもありがとうございました。今日は本当に話題の幅が、私の能力を遙かに超えていて、まとめられないことはほとんどできません。ただ今回ディスカッションではたくさんヒントが出てきて、様々な異なる時空間の人達がつながる、流域のことをみんなで聞く、調べる、体感する、そして情報を集積し、発信し、それを元に合意を作っていくような仕組みを作る、町の人に何ができるか、山村の人に何ができるか、どうしたら利用しながら自然を守っていく仕組みを作っていけるのか、それぞれの場所で、みんなができることをしていきたいなということを本当に思いました。今日は本当に、つたないコーディネートで申し訳ありませんでした。本当に皆さん、どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。パネラーの皆様、コメントーターの涌井様、そして会場の皆様、熱い時間をどうもありがとうございました。あらためて御礼申し上げます。皆様が退場されますので、もう一度、拍手をお願い致します。

ありがとうございました。最後に、豊田市矢作川研究所常任顧問 松武義聰が、閉会の挨拶を申し上げます。

○松武 多くの方々が立ち席で、本当にご苦勞様でございました。ありがとうございました。私も「サンデーモーニング」、そしてNHKの「プラタモリ」でやさしく、くわしく解説して下さいました涌井先生、私も先生のファンの1人です。ありがとうございました。今日は本当に過密なスケジュールの中をご出席頂きまして、重ねて御礼申し上げます。自然は生きているということで、人間の対応次第では良くも悪くもなる、あまりもう時間がないというお話で、非常にこれからの大事な時間だと思っております。近く開かれるCOP10の成功を楽しみにしております。また、中本先生と阿部先生におかれましては、本当に息の合った対話をやって頂きましてありがとうございます。川での遊び方、それから魚の生きる環境づくりについて、非常にユーモアを交えてお話頂きました。ありがとうございます。また、パネルディスカッションにつきましては、涌井先生にうまくまとめて頂き

ましてありがとうございます。新見先生、大沼先生、浅香先生、丹羽先生、そしてコーディネーターの洲崎先生、どうもありがとうございました。そして、国土交通省中部地方整備局、それから並びに愛知県建設部にはご後援を頂きまして、篤く御礼申し上げます。それぞれの流域の川の水は、一つの大きな海の中に流れてきております。矢作川研究所では、本日のシンポジウムを活かしながら、これからもより広く深く研究を重ね、それから社会に貢献していきたいと思っております。最後になりましたけれども、会場の皆さん、長時間にわたりありがとうございました。